

令和6年度

学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究（専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究）

A. 全国学力・学習状況調査の国語の結果を活用した専門的な分析

調査報告書

令和7年3月

安田女子大学

第1章 調査概要

1-1 調査研究テーマ

学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究（専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究）

- ・ A. 全国学力・学習状況調査の国語の結果を活用した専門的な分析

1-2 調査研究の趣旨

文部科学省では、児童生徒の学力や学習状況を把握し、教育施策や指導の改善を図るとともに、児童生徒の学習状況の改善に役立てるため、全国学力・学習状況調査を実施している。

平成29年告示学習指導要領（以下、「現行学習指導要領」という。）では、小学校国語、中学校国語ともに、育成を目指す資質・能力の明確化という改訂の基本方針を踏まえ、「内容」を〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕で構成することや、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項が位置付けられている。全国学力・学習状況調査においても、これらを踏まえ、「調査問題作成の枠組み」として以下が示されている。

令和5年度全国学力・学習状況調査 中学校国語 I 中学校国語科の調査問題作成に当たって

学習指導要領に示されている以下の内容に基づいて、その全体を視野に入れながら、中心的に取り上げるものを精選した。なお、中学校第2学年までの内容となるようにしている。

〔知識及び技能〕

(1)言葉の特徴や使い方に関する事項

(2)情報の扱い方に関する事項

(3)我が国の言語文化に関する事項

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・聞くこと

B 書くこと

C 読むこと

※ 「A 話すこと・聞くこと」については、生徒が実際に話したり聞いたりするような調査を行うことが難しいため、場面設定・状況設定などを工夫して、話す・聞く活動にできるだけ近づけた出題となるようにした。また、評価の観点として、「知識・技能」、「思考・判断・表現」に関わるものを出題した。

（国立教育政策研究所教育課程研究センター（2023）「令和5年度全国学力・学習状況調査 解説資料 中学校国語」による）

これらを踏まえ、現行学習指導要領が実施された翌年以降（小学校：令和3～6年度、中学校：令和4～6年度、）に実施された全国学力・学習状況調査の国語の教科調査及び質問調査の結果のうち、直近の令和6年度調査（研究課題によっては令和5年度調査）を対象とし、後述する国語科の特質を踏まえた各項目について、平均正答率が高い（低い）など特徴ある結果を示した学校や教育委員会等の取組について、質問調査の結果等も活用した分析を行うとともに、授業における学習指導の考え方など、実際の取組状況についてアンケートや訪問ヒアリングによる調査を行うこととした。

調査研究に当たっては、施策への反映や調査の妥当性・信頼性を高めるため、文部科学省と緊密な協議を行った。

1-3 実施体制

調査研究は以下の構成、役割、メンバーで行った。調査研究の専門性を考慮し、文部科学省教科調査官・学力調査官経験者、新旧学習指導要領の作成協力者、言語研究・テスト理論に精通した研究者等で構成した。

○事業責任者……事業全体の管理・監督、訪問調査先の調整等を行う。

大滝 一登（安田女子大学文学部日本文学科 教授）

○小学校部会……主に小学校の学力調査に関する調査研究、訪問等を行う。

主査 難波 博孝（安田女子大学教育学部児童教育学科 教授）

委員 吉田 裕久（安田女子大学教育学部児童教育学科 教授）

委員 中村 和弘（東京学芸大学大学院教育学研究科 教授）

- 委員 折川 司（金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授）
 委員 北川 雅浩（熊本大学教育学部国語科教育講座 准教授）
 委員 渡 辺 誠（横浜市教育委員会事務局教育政策推進課 首席指導主事）

○中学校部会……主に中学校の学力調査に関する調査研究、訪問等を行う。

- 主査 大滝 一登（再掲）
 委員 高木まさき（教科書研究センター 統括研究監）
 委員 安部 朋世（千葉大学教育学部 教授）
 委員 黒田 諭（北海道教育大学附属函館中学校 副校長）
 委員 松下 達彦（国立国語研究所研究系 教授）
 委員 笹尾 洋介（京都大学国際高等教育院 准教授）

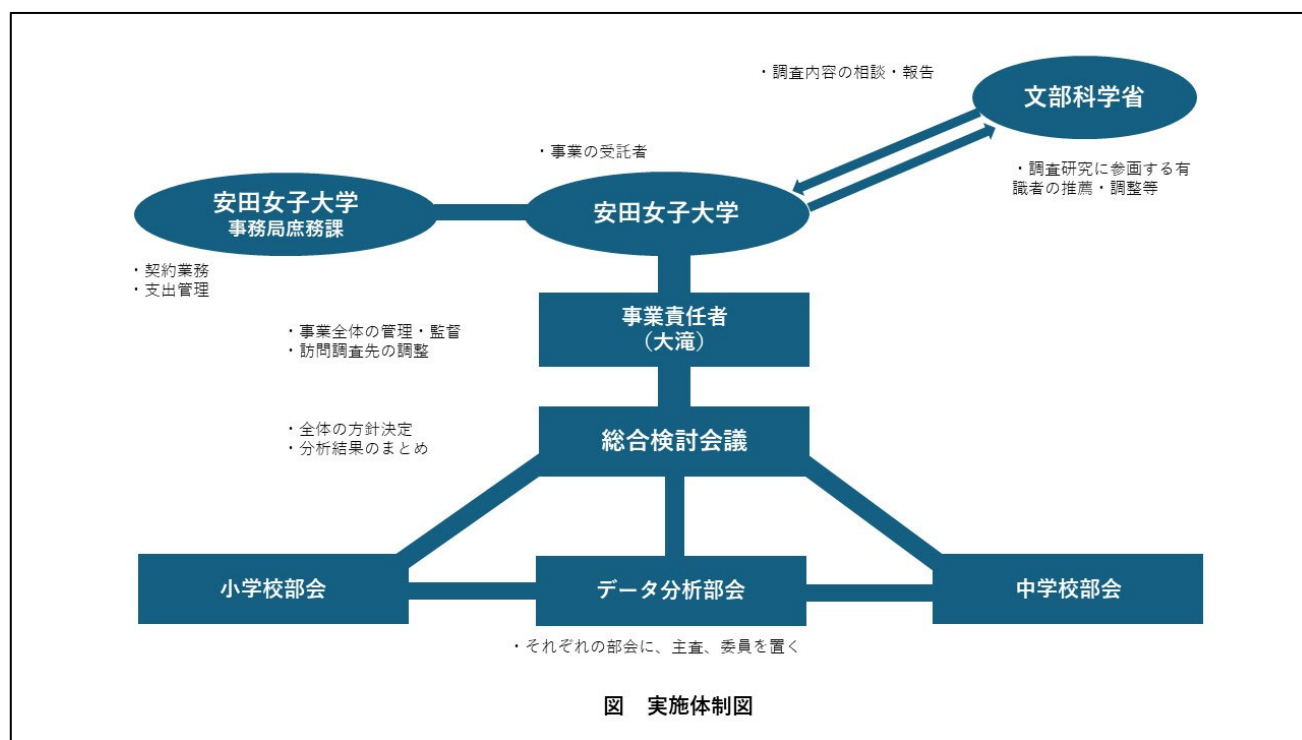
○データ分析部会……貸与された学力調査に関する分析、整理等を行う。

- 主査 笹尾 洋介（再掲）
 委員 松下 達彦（再掲）
 委員 難波 博孝（再掲）
 委員 大滝 一登（再掲）

○会計等担当……本事業に関する会計処理等を行う。

山下 文宣（安田女子大学事務局庶務課）

※なお、本事業の実施に当たっては、上記メンバー全員が参画し、全体の方針決定及び分析結果の検討、整理等を行う総合検討会議を設けることとした。



1-4 調査研究の具体的な内容

1-4-1 研究課題① 「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討

文部科学省・国立教育政策研究所によると、OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2018 における読解力項目の結果においては、「読解力の自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある。」と指摘された。

現行学習指導要領の「C読むこと」の学習過程には「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成、共有」が設けられており、「自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明すること」は「考えの形成、共有」の指導事項の一部にそれぞれ関連が深いと考えられる（表 1-1 及び表-1-2 参照）。

一方これらの課題は、OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2022 においては、おおむね改善されたとされるが、「今回の結果には、新型コロナウイルス感染症のため休校した期間が他国に比べて短かったことが影響した可能性があること」が、OECD から指摘されたとされる。

そこで、現行学習指導要領を踏まえた学力調査の設問のうち、先の課題と特に関係が深いと考えら「C読むこと」における「考えの形成」に関する指導事項を問う設問を抽出しその顕著な特徴を分析することとした。なお、「考えの形成」に関する指導事項を問う設問は、小学校調査、中学校調査ともに令和5年度調査にしか出題されていなかったため、令和5年度調査のみを対象とした。

分析に当たっては、「C読むこと」全体の得点との関係等を踏まえた上で、「C読むこと」における「考えの形成」に関する設問について顕著な特徴を示す学校を一定の条件に基づいて抽出し、アンケート調査を行うとともに、訪問ヒアリング調査を行い、その要因と考えられる学習指導の意図や特徴等の抽出を試みた。

表 1-1 PISA 調査「読解力」で測定する能力

PISA 調査「読解力」で測定する能力	
①情報を探し出す	・テキスト中の情報にアクセスし、取り出す ・関連するテキストを探索し、選び出す
②理解する	・字句の意味を理解する ・総合し、推論を創出する
③評価し、熟考する	・質と信ぴょう性を評価する ・内容と形式について熟考する ・矛盾を見つけて対処する

表-1-2 現行学習指導要領「C読むこと」の学習過程

学習過程	中学校学習指導要領解説国語編の解説	本研究項目と関連が深いと考えられる指導事項
構造と内容の把握	叙述を基に、文章の構成や展開を捉えたり、内容を理解したりすること	小 1・2 年アイ、3・4 年アイ、5・6 年アイ 中 1 年アイ、2 年ア、(3 年ア)
精査・解釈	文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて意味付けたり考えたりすること	小 1・2 年ウエ、3・4 年ウエ、5・6 年ウエ 中 1 年イ、2 年イ、(3 年イウ)
考えの形成、共有	文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な経験と結び付けて考えをまとめたり広げたり深めたりしていくこと	小 1・2 年オ、3・4 年オ、5・6 年オ 中 1 年オ、2 年オ、(3 年オ)

※ () 内の指導事項は教科調査の対象外

1-4-2 研究課題② 「C読むこと」における各学習過程の調査に関する特徴的な結果の抽出

令和 6 年度調査及び令和 5 年度調査に関して、1-4-1 に示した現行学習指導要領における「C読むこと」の学習過程である「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成、共有」について、国語の教科調査における該当設問を抽出して設問間の相関関係の分析を行い、各資質・能力相互の関係性の程度に関する分析を行った。特に、研究課題①で取り上げた「考えの形成」に関する該当設問については、相関関係の高い設問の抽出を試みた。

また、各該当設問と相関関係の高い「知識及び技能」の設問を抽出するとともに、質問調査についても相関関係の高い項目を明らかにすることとした。

1-4-3 研究課題③ 特定の領域の調査結果と他の領域または質問調査結果との相関に関する特徴的な結果の抽出

全国学力・学習状況調査については、これまで実施年ごとの分析、及び経年調査による分析など様々な分析が行われてきた。公表された報告書では、平均正答率と質問調査との相関分析は行われているが、国語の資質・能力相互の相関についての分析は十分とはいえない。

学力調査においては、「C読むこと」の資質・能力が他の領域の調査結果に影響を与えているのではないかという仮説も立てられる。

そこで、令和 6 年度調査において、「C読むこと」のどの資質・能力が、他のどの領域のどの資質・能力に影響を与えているかについて明らかにするため、関係する設問相互の関連性についても分析を行った。

また、全体の報告書では、平均正答率と質問調査との相関分析は行われているが、領域ごとの結果との関係性に関する分析は行われていない。そこで、特に平均正答率が顕著に高い(低い)学校等について、特定の領域のいずれかの資質・能力と、児童生徒の意識とに相関関係が認められるかについて分析を行った。分析に当たっては、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の結果及び「国語は好きだ」等の項目との相関分析を行った。

1-4-4 研究課題④ その他、令和 6 年度調査結果に関する顕著な特徴についての分析

研究課題①から③に加えて、令和6年度全国学力・学習状況調査結果を踏まえ、必要に応じて、必要な分析等を行った。具体的には、国語の教科調査と算数・数学の教科調査との関係、各設問の相関と分類から考える資質・能力間の関係、無解答及び解答時間、性差などにおいて、顕著な特徴についての分析と検討を行った。

第2章 研究課題①「「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討」に係る訪問調査校を決定するまでの流れ

2-1 分析に使用したデータ

第1章に示した調査研究の具体的な内容のうち、「1-4-1 「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討」に関する訪問調査校の絞り込みに当たっては、全国学力・学習状況調査の国語調査において、単に総得点が高いといった特徴の学校ではなく、学習指導要領に基づいた学習状況のうち、「読むこと」領域の「考えの形成」に関する指導事項をねらいとした問題において特に高い傾向を示した学校を抽出し、訪問調査を行うこととした。これは、PISA 調査においても「読解力」項目という「読むこと」に相当する調査項目が設定されていることや、全国学力・学習状況調査の「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」領域においても、「読むこと」領域の資質・能力の必要性が前提とされていることなどから、「読むこと」領域を特に取り上げることとし、加えて、「読むこと」領域の指導事項の中でも、「構造と内容の把握」や「精査・解釈」の学習を踏まえて、高次の「考えの形成」の学習につながると考えられることから、「考えの形成」に関する指導事項をねらいとした問題において特に高い傾向を示した学校において、国語の資質・能力を育成する指導の工夫等の要因が存在すると考えたためである。

しかし、「考えの形成」に関する指導事項をねらいとした問題は、令和5年度にしか出題されていない。そこで、本調査では、令和5年4月18日に実施された全国学力・学習状況調査の小学校国語および中学校国語の結果を使用した。この調査の対象児童生徒は、小学校調査では、小学校第6学年、義務教育学校前期課程第6学年、特別支援学校小学部第6学年である。中学校調査では、中学校第3学年、義務教育学校後期課程第3学年、中等教育学校前期課程第3学年、特別支援学校中学部第3学年である。具体的な対象学校数は、表2-1に示す通りである。

表2-1 集計学校数

小学校		調査対象者の在籍する 学校数	4月18日に 調査を実施した学校数 (実施率%)	4月18日～4月28日に 調査を実施した学校数 (実施率%)
	公立	18,672校	18,619校 (99.7%)	18,641校 (99.8%)
	国立	75校	75校 (100.0%)	75校 (100.0%)
	私立	244校	127校 (52.0%)	130校 (53.3%)
	合計	18,991校	18,821校 (99.1%)	18,846校 (99.2%)
中学校		調査対象者の在籍する 学校数	4月18日に 調査を実施した学校数 (実施率%)	4月18日～4月28日に 調査を実施した学校数 (実施率%)
	公立	9,408校	9,339校 (99.3%)	9,369校 (99.6%)
	国立	80校	78校 (97.5%)	80校 (100.0%)
	私立	799校	285校 (35.7%)	291校 (36.4%)
	合計	10,287校	9,702校 (94.3%)	9,740校 (94.7%)

文部科学省国立教育政策研究所（2023）「令和5年度 全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語」を基に作成

2-2 特徴ある結果を示した学校などを抽出する際の視点と抽出結果

特徴ある結果を示した学校などを抽出する際の視点の検討を行った結果、以下の条件1から条件5を抽出の視点とした。

- 条件1：学校種からの絞り込み
- 条件2：「読むこと」領域の設問からの絞り込み
- 条件3：学校質問項目からの絞り込み
- 条件4：社会経済条件（SES）からの絞り込み
- 条件5：学校規模による絞り込み

以下に、それぞれの条件で抽出を行った結果を示す。

2-2-1 条件1 学校種による絞り込み

小学校国語の調査問題を実施した全学校（ $N = 18,846$ ）のうち、令和5年4月18日当日に調査問題を実施した公立小学校のみを抽出した。ただし、特別支援学校と義務教育学校は除外した。その結果、条件1を満たす小学校として、18,277校を抽出した。

また、中学校国語の調査問題を実施した全学校（ $N = 9,740$ ）のうち、令和5年4月18日当日に調査問題を実施した公立中学校のみを抽出した。ただし、中等教育学校（前期課程）、特別支援学校、義務教育学校、ならびに都立・府立・県立の中学校は除外した。その結果、条件1を満たす中学校として8,826校を抽出した。都立・府立・県立中学校を除外した理由は、後述する条件2の抽出過程において、これらの学校が多数含まれていたものの、入学時に実施される適性検査の影響と、当該校における教育指導の効果とを区別することが困難であると判断したためである。

2-2-2 条件2 「読むこと」領域の設問からの絞り込み

小学校・中学校のいずれにおいても、以下の二つの条件を設定した。

- (1) 令和5年度「読むこと」領域の設問における平均正答数が全体平均より0.5SD以上であること
- (2) 令和5年度「読むこと」の「考えの形成」の資質・能力を問う設問における平均正答率が全体平均より0.5SD以上であること

まず、本調査では、PISA調査の対象でもある「読むこと」領域に着目したため、全体として「読むこと」の領域における達成度が高い学校を抽出するため、条件2の(1)を設定した。その上で、本調査が特に焦点を当てている「考えの形成」に関する設問でも、同様に高い傾向を示している学校を抽出するため、条件2の(2)を追加した。

小学校国語の調査問題において、条件2において使用した問題を表2-2に示す。条件1と条件2を満たす小学校として、3,328校が抽出された。

表2-2 小学校の絞り込みに使用した問題

問題番号		出題の趣旨	問題形式	全国平均 正答率	条件2の (1)	条件2の (2)
2	一	目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができるかどうかをみる。	選択式	90.1%	○	
2	二	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる。	選択式	67.6%	○	
2	四	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。	記述式	56.4%	○	○

中学校国語の調査問題において、条件2において使用した問題を表2-3に示す。条件1と条件2を満たす中学校として、1,395校が抽出された。

表2-3 中学校の絞り込みに使用した問題

問題番号		出題の趣旨	問題形式	全国平均 正答率	条件2の (1)	条件2の (2)
②	二	観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えることができるかどうかをみる	選択式	63.4%	○	
②	三	文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握することができるかどうかをみる	選択式	74.5%	○	
②	四	文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができるかどうかをみる	記述式	67.8%	○	○
④	三	文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	記述式	50.5%	○	

2-2-3 条件3 学校質問項目からの絞り込み

小学校・中学校のいずれにおいても、以下の二つの条件を設定した。

- (1) 令和5年度調査において以下の学校質問項目で「そう思う」と回答した学校

(A) 調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

(B) 調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか

(2) 令和6年度調査においても上記(1)と同じ学校質問項目で「そう思う」と回答した学校

条件3の(1)は、以下に示すデータ分析結果をもとに設定した。令和5年度の小学校の全学校質問項目(92項目)について、国語合計得点の学校平均値との相関係数(Pearsonのr)を算出した。その結果、「調査対象学年の児童は、熱意をもって勉強していると思いますか」という質問項目に次いで、項目(A)および(B)が、それぞれ2番目および3番目に国語合計得点との相関(絶対値で評価)が高いことが確認された。同様に、令和5年度の中学校の全学校質問項目(100項目)について、国語合計得点の学校内平均値との相関係数(Pearsonのr)を算出した。その結果、「調査対象学年の児童は、熱意をもって勉強していると思いますか」という質問項目に次いで、項目(A)および(B)が、それぞれ3番目および2番目に国語合計得点との相関(絶対値で評価)が高いことが確認された。

質問項目(A)および(B)は、令和3年度以降、4年にわたり継続的に調査対象項目として含まれているが、令和5年度を除くいずれの年度においても、小学校と中学校ともに国語合計得点の学校内平均値との相関の強さは全学校質問項目において1番目または2番目となっている。なお、「調査対象学年の児童は、熱意をもって勉強していると思いますか」は、令和5年度のみで実施された項目である。

表2-4は、小学校を対象とした令和3年度から令和6年度までの各年度における、質問項目(A)および(B)と国語合計得点の学校内平均値との相関係数の順位(カッコ内はPearsonのr)を示したものである。

表2-4 質問項目(A)(B)と国語合計得点の相関係数順位(小学校)

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
--	-------	-------	-------	-------

項目 (A)	2 位 (. 236)	2 位 (. 250)	2 位 (. 238)	1 位 (. 249)
項目 (B)	1 位 (. 240)	1 位 (. 254)	3 位 (. 236)	2 位 (. 235)

表 2-5 は、中学校を対象として、表 2-4 と同様の分析を行った結果を示している。

表 2-5 質問項目 (A) (B) と国語合計得点の相関係数順位 (中学校)

	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
項目 (A)	2 位 (. 263)	1 位 (. 274)	3 位 (. 287)	2 位 (. 282)
項目 (B)	1 位 (. 274)	2 位 (. 271)	2 位 (. 309)	1 位 (. 307)

表 2-4 と表 2-5 が示す通り、小学校と中学校のいずれにおいても質問項目 (A) および (B) は、継続的に国語合計得点と高い相関を示している。これらの項目において「そう思う」と回答している学校を訪問調査の対象とすることにより、有益な知見が得られるものと考えられる。

さらに、質問項目 (A) および (B) に対する回答傾向と、国語の調査問題における解答傾向との関係を把握するため、クロス集計表を作成した。表 6 および表 7 は、それぞれ小学校と中学校におけるクロス集計結果である。学校質問項目 (A) および (B) に対する回答は、以下の 4 段階で集計した。

- 1 : そう思う
- 2 : どちらかといえば、そう思う
- 3 : どちらかといえば、そう思わない
- 4 : そう思わない

クロス集計表では、質問項目 (A) および (B) の回答区分ごとに、該当する学校数、国語合計得点の平均値 (M) および標準偏差 (SD)、さらに「読むこと」の「考えの形成」の資質・能力を問う設問における正答率の平均値 (M) および標準偏差 (SD) を示している。(なお、「その他・無回答」を除外しているため、合計値が一致しない場合がある。)

表 2-6 学校質問 (A) (B) 回答種類ごとのクロス集計 (小学校)

質問 (A)	質問 (B)	該当学校数	合計点		問題 2 の四	
			M	SD	M	SD
1	1	1,986	9.82	1.09	60.89%	16.16
	2	2,008	9.68	0.94	59.32%	15.63
	3	92	9.26	1.23	55.62%	18.35
	4	2	9.50	0.58	58.25%	7.24
2	1	565	9.62	0.99	58.19%	14.98
	2	9,770	9.39	0.99	56.56%	13.97
	3	2,327	9.07	0.98	54.12%	13.64
	4	7	8.53	0.87	48.24%	12.81
3	1	7	9.73	0.93	53.65%	16.48
	2	577	9.04	0.99	53.16%	14.27
	3	1,415	8.76	1.10	50.43%	14.97
	4	21	8.41	1.14	48.93%	15.92
4	1	—	—	—	—	—
	2	6	7.91	2.54	50.94%	32.25

	3	20	8.43	0.67	47.55%	15.01
	4	24	7.92	1.44	48.08%	15.74
計		18,827	9.37	1.05	56.45%	14.75

表 2-7 学校質問 (A) (B) 回答種類ごとのクロス集計 (中学校)

質問 (A)	質問 (B)	該当学校数	合計点		問題2の四	
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1	1	1,096	11.16	1.30	72.65%	13.62
	2	821	10.70	1.07	69.65%	12.66
	3	19	10.11	0.73	66.21%	6.76
	4	—	—	—	—	—
2	1	397	10.88	1.13	69.90%	13.22
	2	5,331	10.41	1.04	67.04%	12.64
	3	912	10.03	1.17	64.46%	13.23
	4	6	8.84	1.29	52.12%	11.01
3	1	8	10.35	0.90	64.61%	11.71
	2	322	10.07	1.05	63.49%	14.10
	3	784	9.60	1.36	59.95%	17.01
	4	17	9.61	1.31	48.86%	25.51
4	1	—	—	—	—	—
	2	4	9.87	0.75	62.23%	7.45
	3	6	9.81	0.59	69.91%	10.93
	4	8	7.68	1.91	36.26%	28.22
計		9,735	10.42	1.19	67.01%	13.73

表 2-6 および表 2-7 から明らかなように、質問項目 (A) および (B) のいずれにも「1」（そう思う）と回答した学校群は、国語合計得点ならびに「考えの形成」に関する設問への正答率の平均値が最も高い結果となっている。このことは、当該質問項目への肯定的な回答が、児童・生徒の国語に関する全般的な力および自らの考えを形成する能力の育成に資する学習活動や授業実践の存在を示唆しているものと考えられる。これらの結果を踏まえ、条件 3 の (1) では、質問項目 (A) および (B) にいずれも「1」と回答した学校を抽出対象とした。

さらに、条件 3 の (2) では、令和 6 年度においても、これらの質問項目に対して一貫して高い回答傾向（「そう思う」）を示している学校を抽出し、継続的な取組の状況を把握することを目的として設定した。これにより、単年度の実践にとどまらず、継続かつ安定的に学習指導を実施している学校の特徴を明らかにし、訪問調査を通じて、より実効性の高い教育実践の分析・検証を行うことが期待される。

条件 1 から条件 3 を満たす小学校および中学校として、それぞれ 140 校と 93 校が抽出された。

2-2-4 条件 4 社会経済条件 (SES) からの絞り込み

自宅の蔵書数を、児童生徒の社会経済的背景 (SES) を示す指標の一つと捉え、小学校・中学校ともに、以下の条件を設定した。

自宅にある本の冊数の推定値の学校平均が全体平均より 1.0SD 以下であること

条件 1 から条件 3 までの絞り込みを行った結果、首都圏や大都市圏の学校が多く抽出された。そこで、社会経済状況が平均的な水準にある学校を選定することを目的とし、本条件を設定した。なお、児童生徒や学校の社会経済的背景（SES）に関する直接的な指標は本調査では利用できないため、各学校における児童生徒の自宅での蔵書数の平均値を、SES の代替指標として用いた。

蔵書数の推定に関する具体的な算出方法は以下の通りである。児童質問紙（22）または生徒質問紙（22）の設問「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか（雑誌、新聞、教科書は除く）」に対する回答を基に、表 2-8 に示すように選択肢ごとの中央値を代用値として設定し、学校ごとにその平均を算出した。ただし、選択肢 6（501 冊以上）については上限が設定されていないため、最小値である 501 冊を代用値とした。

表 2-8 自宅での蔵書数の推定

選択肢	代用値
1 : 0 ～ 10 冊	5 冊
2 : 11 ～ 25 冊	18 冊
3 : 26 ～ 100 冊	63 冊
4 : 101 ～ 200 冊	151 冊
5 : 201 ～ 500 冊	351 冊
6 : 501 冊 以上	501 冊

条件 1 から条件 4 を満たす小学校および中学校として、それぞれ 96 校と 62 校が抽出された。

2-2-5 条件 5 学校規模による絞り込み

個人の結果が学校全体の平均に大きく影響することを避けるために、以下の条件を設けた。

令和 5 年度 国語調査参加者（当日実施）が 30 人以上の学校であること

条件 1 から条件 5 を満たす小学校および中学校として、それぞれ 48 校と 44 校が抽出された。これらの学校に訪問調査の依頼を行った。

2-3 特徴ある結果を示した学校へのアンケート調査による取組内容等の把握

ここまでの条件1～条件5による絞り込みによって、小学校は48校、中学校は44校に絞り込まれた。そこで、これらの学校を対象にアンケート調査を実施し、各学校の取組内容を把握し、訪問調査を行う学校を絞り込んだ。

2-3-1 アンケート調査の概要

アンケート調査は以下の要領で実施した。

- ・実施にあたっては、文部科学省総合教育政策局調査企画課学力調査室より、訪問調査対象候補となった学校がある都道府県教育委員会及び当該校を所管する市町村教育委員会に依頼文書を発出した。
- ・この依頼文には、訪問調査対象候補へのアンケートは、文部科学省から学校に直接依頼をすることや、アンケート調査の結果によっては、追加で訪問調査を依頼することがあることを記載した。
- ・アンケート内容は、小学校・中学校とも「1. 学校全体について 国語科教育における取組」と「2. 国語科授業の取組」で構成した。
- ・「1. 学校全体について 国語科教育における取組」については、学校の代表の方に回答を依頼した。
- ・「2. 国語科授業の取組」については、令和5年度全国学力・学習状況調査（国語）の対象児童生徒を、直接指導されていた教師に回答を依頼した。人事異動等で、該当の教師が在籍されていない場合には、現在、学校で国語科授業を中心的に行っている教師に回答を依頼した。

また、アンケート内容は以下の通りである（表2-9）。

表2-9 特徴ある結果を示した学校へ実施したアンケート調査項目

小学校へのアンケート内容		中学校へのアンケート内容	
1. 学校全体について 国語科教育における取組		1. 学校全体について 国語科教育における取組	
貴校は、過去3年間において、教育委員会等から研究指定(取り組む教科に国語科が含まれている)を受けていましたか。	1 (1)	1 (1)	貴校は、過去3年間において、教育委員会等から研究指定(取り組む教科に国語科が含まれている)を受けていましたか。
(問1ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)それは、どのような研究指定でしたか。名称を教えてください。	1 (2)	1 (2)	(問1ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)それは、どのような研究指定でしたか。名称を教えてください。
貴校では、今年度、校内研修も含めて、よりよい国語科授業のあり方を求めて研究授業が行われましたか。もしくは、今後、行われる予定はありますか。	2 (1)	2 (1)	貴校では、今年度、校内研修も含めて、よりよい国語科授業のあり方を求めて研究授業が行われましたか。もしくは、今後、行われる予定はありますか。
(問2ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)その「研究授業」の内容はどのようなものでしたか。学年や領域、教材などを教えてください。	2 (2)	2 (2)	(問2ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)その「研究授業」の内容はどのようなものでしたか。学年や領域、教材などを教えてください。
(問2ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)研究授業の成果があがるようにするために、どのような工夫を行っていますか、具体的に教えてください。	2 (3)	2 (3)	(問2ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)研究授業の成果があがるようにするために、どのような工夫を行っていますか、具体的に教えてください。
貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。	3 (1)	3 (1)	貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。
(問3ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)それは、どのような取組ですか。具体的に教えてください。	3 (2)	3 (2)	(問3ー(1)で「1. はい」と回答された方へ)それは、どのような取組ですか。具体的に教えてください。
貴校の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。	4 (1)	4 (1)	貴校の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。
(問4ー(1)で「1. そう思う」「2. どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)児童が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができるようにするために、どのような取組をしていますか。	4 (2)	4 (2)	(問4ー(1)で「1. そう思う」「2. どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)生徒が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができるようにするために、どのような取組をしていますか。
貴校の児童は、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると考えますか。	5 (1)	5 (1)	貴校の生徒は、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると考えますか。
(問5ー(1)で「1. そう思う」「2. どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ) 児童が、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができるようにするために、どのような取組をしていますか。	5 (2)	5 (2)	(問5ー(1)で「1. そう思う」「2. どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ) 生徒が、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができるようにするために、どのような取組をしていますか。

貴校において令和4年度第5学年の国語科指導を直接行った教員で、今年度も貴校に勤務されている教員はいますか。	6	6	貴校において令和4年度第2学年の国語科指導を直接行った教員で、今年度も貴校に勤務されている教員はいますか。
貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。	7 (1)	1 (1)	貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。
(問7ー(1)で「1. 活用している」「2. どちらかといえば、活用している」と回答された方へ) 活用の仕方について、簡潔に教えて下さい。	7 (2)	7 (2)	(問7ー(1)で「1. 活用している」「2. どちらかといえば、活用している」と回答された方へ) 活用の仕方について、簡潔に教えて下さい。

小学校へのアンケート内容		中学校へのアンケート内容	
2. 国語科授業の取組		2. 国語科授業の取組	
このアンケートに回答くださる方は、令和5年度全国学力・学習状況調査(国語)の対象児童を令和4年度(小学校第5学年の時)に直接指導されていた先生ですか。	1	1	このアンケートに回答くださる方は、令和5年度全国学力・学習状況調査(国語)の対象生徒を令和4年度(中学校第2学年の時)に直接指導されていた先生ですか。
貴校は、国語科授業づくり(指導方法、ICTの活用、評価など)や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。	2 (1)	2 (1)	貴校は、国語科授業づくり(指導方法、ICTの活用、評価など)や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。
(問2ー(1)で「1. よく行っている」「2. 少し行っている」と回答された方へ) 特徴的なエピソードを具体的に教えてください。	2 (2)	2 (2)	(問2ー(1)で「1. よく行っている」「2. 少し行っている」と回答された方へ) 特徴的なエピソードを具体的に教えてください。
あなたが、学習指導要領の「C 読むこと」に示された学習過程(指導事項)の重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。	3	3	あなたが、学習指導要領の「C 読むこと」に示された学習過程(指導事項)の重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
あなたが、小学校高学年の国語科「C 読むこと」の言語活動として、よく行っているものを選択してください。	4 (1)	4 (1)	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の言語活動として、よく行っているものを選択してください。
あなたが、小学校の国語科「C 読むこと」の言語活動を取り入れる際に重視していることはどのようなことですか。	4 (2)	4 (2)	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の言語活動を取り入れる際に重視していることはどのようなことですか。
「C 読むこと」の指導において、あなたは、児童が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。	5 (1)	5 (1)	「C 読むこと」の指導において、あなたは、生徒が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。
(問5ー(1)で1~3と回答した方にお尋ねします。)児童が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。	5 (2)	5 (2)	(問5ー(1)で1~3と回答した方にお尋ねします。)生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。
児童が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。	5 (3)	5 (3)	生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。
「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、児童が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度につ	6 (1)	6 (1)	「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、生徒が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度につ

いて、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。			いて、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
「言葉の特徴や使い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。	6 (2)	6 (2)	「言葉の特徴や使い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。
「情報の扱い方に関する事項」のうち、児童が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。	7 (1)	1 (1)	「情報の扱い方に関する事項」のうち、生徒が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
「情報の扱い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。	7 (2)	7 (2)	「情報の扱い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。
小・中学校学習指導要領では、「(3)我が国の言語文化に関する事項」に読書の指導事項が明記されていますが、その指導を行う際に工夫している点を教えてください。	8	8	小・中学校学習指導要領では、「(3)我が国の言語文化に関する事項」に読書の指導事項が明記されていますが、その指導を行う際に工夫している点を教えてください。
あなたは、国語科の授業でICT(一人一台端末を含む)を活用していると思いますか。	9	9	あなたは、国語科の授業でICT(一人一台端末を含む)を活用していると思いますか。
あなたが、小学校の国語科「C 読むこと」の学習評価を適切に行うために、どのようなことを重視していますか。	10	10	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の学習評価を適切に行うために、どのようなことを重視していますか。

2-3-2 アンケート調査の結果を基にした、訪問調査校の絞り込み

アンケート調査の回答率は以下の通りである。

【小学校】

- ・「1. 学校全体について 国語科教育における取組」のアンケートについては、48 件中 34件の回答を得た。（回答率 70.8%）
- ・「2. 国語科授業の取組」のアンケートについては、48 件中 35 件の回答を得た。（回答率 72.9%）

【中学校】

- ・「1. 学校全体について 国語科教育における取組」のアンケートについては、44 件中 29件の回答を得た。（回答率 65.9%）
- ・「2. 国語科授業の取組」のアンケートについては、44 件中 28 件の回答を得た。（回答率 63.6%）

ここから（視点1）（視点2）によって、訪問調査校の絞り込みを行った。

（視点1）成果を上げている学校に見られる、共通項をさぐる。

1. 「学校全体について 国語科教育における取組」の調査から

問3—（1）「貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。」について、「1. はい」と回答している学校は、小学校で97.1%、中学校で96.7%であった。

問7—（1）「貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。」について、「1. 活用している」「2. どちらかといえば、活用している」と回答している学校は、小学校で94.3%、中学校で86.6%であった。

2. 「国語科授業の取組」の調査から

問2—（1）「貴校は、国語科授業づくり（指導方法、ICTの活用、評価など）や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。」について、「1. よく行っている」「2. 少し行っている」と回答している学校は、小学校で90.0%であった。（なお中学校については規模の小さい学校もあるためこの基準は考慮しなかった。）

問5—（1）「「C 読むこと」の指導において、あなたは、生徒が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。」について、「1. よく行っている」「2. まあまあ行っている」と回答している学校は、小学校で95.0%、中学校で89.3%であった。

問9「あなたは、国語科の授業でICT（一人一台端末を含む）を活用していると思いますか。」について、「1. はい」と回答している学校は、小学校で90.0%、中学校で82.1%であった。

（視点2）中学校について、（1）の条件を弱め新たな条件を別途加える。

（視点1）によって小学校については候補校を13校に絞ることができたが、中学校の候補校が少なかったため、（1）の絞り込み条件を弱めた上で、下記の条件を新たに加えて絞り込んだ。

問3「あなたが、学習指導要領の「C読むこと」に示された学習過程（指導事項）の重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。」のうち「考えの形成・共有」に5と記入している学校。中学校で67.9%であった。

問5—（2）「生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。」および問5—（3）「生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。」について、特に注目する回答があった学校。回答の具体の一部は表2-10のとおりである。

表2-10 問5-（2）および問5-（3）の回答の具体

問5—（2）「生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。」	問5—（3）「生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。」
考える中で、最終的に出来上がった意見だけを見るのではなく、どのような過程を経	学習の最初から最後まで、一方通行で展開するのではなく、つまずいたりうまくいか

てその考えが形成されたか、当初抱いていた考えとの共通点、相違点はどこか。それらの考えが文章や学習したこととどのように結びついているのかをしっかりと見ること。	なかったりする場面では、立ち止まって必要な事項においてじっくりと説明したり、少し前に遡って復習を行うことにより、最終的に振り返ったときに、自分の思考の足跡が見えやすいようにしている。
学習初期の段階では、文章の長さや内容の質にこだわるよりも、「自分で考えて書く」ということを重視するように指導している。また、問いに対する考えを、段階を踏んで考えさせることを通して、理解度や考えの深まり・広がり過程を見取るようにしている。	文章を簡単なスライドにまとめて発表する学習活動の中で、自分の考えを組み込んで伝える場面を設定するなど、自然と自分の考えをもてるような授業づくりを意識している。
評価規準を明確にすること。	生徒の文章を、ICTを活用し、解答（模範解答）の共有する場面を作っている。
その表現や考えが本文の内容を逸脱していないか、をまず考えます。本文に書かれているもの、間接的に書かれているもの、書かれてはいないが十分にそう考え得る根拠のあるもの（妥当なもの）、多少の想像は含むが、その考えを持つこと自体は妥当なもの、の四段階に分け、子供の発想を生かしつつ授業を展開します。重要なのは読みの多様性の担保という、量的な広がりを保障することと、同時に質の担保を行うことだと思います。そのため、より高い質の読みに価値があると気づかせ、評価していくことで、全体の読みの段階を引き上げていけると考えています。	自由な発想を持つ際のルールを、上記のもののように示すことで、多様な考えが出てくるよう想定しつつ、持ちえない視点だけを提示したり、他の考えと比較・組み合わせる助言のみを行ったりします。生徒を暗に少しずつ導く部分はあるつつも、生徒自身が自分の力で考えを形成できたという実感を持てるようにします。スローラーナーには、入り口になる「〇〇に注目してみよう」といったことは示しますが、その中身の気づきや感じ方に違いがあることを伝えることで、考えるきっかけは与えつつ、どんな子にも自分で考えを作ったという経験ができるよう指導しています。
相手・目的・意図を明確にし、生徒の身近な生活場面や体験に結びつく内容として、自分ごととしてとらえることができているかを見極めるようにしている。	主体的に読みたくなるような仕掛けづくりをこころがけ、生徒が自身の知識や経験を想起し、他者と考え合い、共感したり新たな発見をしたりすることで考えを深めることが重要である。そのために、個で考えたことを基にグループで協働的にまとめ、さらにクラス全体で共有する機会を大切にしている。
特にグループ学習の場面では、全てのやり取りを把握することは難しいため、毎回書記を設定し、話し合いの内容を言語化してもらうことを意識している。この記録をもとに、生徒の意見や思考の過程をできる限り見取るよう努めている。 また、評価を行う際には、評価規準を事前に生徒に公表し、透明性を持たせることを大切にしている。これにより、生徒が自分たちの目指すべき方向性を理解しやすくなるだけでなく、公平な評価を心がけることにもつながっている。 こうした工夫を通じて、生徒の表現や学びのプロセスを適切に把握し、信頼される評価を行うよう努めている。	まず、生徒一人一人が文章を読んで自分の考えを整理し、それを明確にする時間を設けている。その後、グループでの話し合いを通じて、他者の視点や新たな知見を得られる場を提供している。このようにすることで、ただ他者の意見に流されるのではなく、自分の考えを基盤にしながら、多様な意見と向き合うことができるようになる。この学習形態によって、生徒が主体的に考えを深める力を育み、文章を通して得た知識や考えをより豊かにすることを目指している。

2-2で行った条件1～条件5及びアンケート結果からの（視点1）、（視点2）を満たす学校とし

て、小学校は13校が該当し、中学校は12校が該当した。
これらの学校にメンバーが直接電話連絡を行い、訪問調査の依頼を行った結果、小学校12校、中学校12校から訪問調査の承諾を得ることができた。

第3章 研究課題①「『C読むこと』における『考えの形成』に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討」に係る訪問調査の実施方法と特徴のある取組の概要

3-1 訪問調査の方法及び日時

訪問調査を実施するに当たり、訪問時の主な観点として、訪問校を決定するまでの過程を踏まえ、以下の観点からインタビュー調査、一部の学校は授業参観も行った。「1.『考えの形成』について」「2.『語彙指導の充実、読書の質向上等について」「3. 学習評価について」「4. 国語におけるICTの活用について」「5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について」「6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について」

なお、訪問調査は、令和7年2月～令和7年3月にかけて実施した。

3-2 訪問調査校

訪問調査を行った学校は以下の通りである。訪問調査を行った学校は公開しないこととする。

【小学校】

	訪問校	訪問日
1	A小学校	令和7年3月6日（木）
2	B小学校	令和7年2月18日（火）
3	C小学校	令和7年2月28日（金）
4	D小学校	令和7年2月28日（金）
5	E小学校	令和7年2月19日（水）
6	F小学校	令和7年2月25日（火）
7	G小学校	令和7年2月19日（水）
8	H小学校	令和7年2月27日（木）
9	I小学校	令和7年2月18日（火）
10	J小学校	令和7年2月27日（木）
11	K小学校	令和7年2月27日（金）
12	L小学校	令和7年2月19日（水）

【中学校】

	訪問校	訪問日
13	N中学校	令和7年2月28日（金）
14	O中学校	令和7年2月28日（金）
15	P中学校	令和7年2月20日（木）
16	Q中学校	令和7年2月17日（月）
17	R中学校	令和7年2月19日（水）
18	S中学校	令和7年2月18日（火）
19	T中学校	令和7年2月5日（水）
20	U中学校	令和7年2月17日（月）
21	V中学校	令和7年2月17日（月）
22	W中学校	令和7年2月4日（火）
23	X中学校	令和7年2月28日（火）
24	Y中学校	令和7年2月19日（水）

3-3 訪問調査の結果

訪問時の観点に沿って、訪問調査校における取組の概要を以下に示す。

3-3-1 「1. 「考えの形成」について」

小学校	中学校
児童が主体的に考えを深める力を育むため、学習の目標や展開を明確に示し、発問や対話を通じて思考を促す。書く活動や、発表・スピーチ等の機会を増やしたりするなど、自分の考えを表現する多様な活動を取り入れる。 ○学習の目標や展開の提示 目標や学習活動の流れを図示するなど児童に分かりやすく示して学習計画を意識させ、学習の見通しを明確に示す。 ○言語活動の重視 「書くこと」や「話すこと」の学習を踏まえ、「読むこと」でも自分の考え等を表現する活動を重視する。 ○根拠に基づく読み 文章を構造的に分析し、本文中の叙述等を明確に示して、妥当な推論を行わせる。 ○学年間の系統的な接続 低学年の学びを高学年でも活用できるよう系統的な指導計画を作成する。 ○対話を通じた思考の深化 児童同士の意見交換を活発にし、多様な視点を学ばせる。 ○発問の工夫 「あなた自身はどう考える？」など児童が自分の考えを表現できるよう、問い掛けを工夫する。 ○意見と理由を意識した書く活動の重視 文章を書く際に、意見と理由のつながりを明確にさせることで、論理的な思考を促す。 ○既習教材との比較 「読むこと」の学習で、既習教材と比較させ、内容や表現について深く考えられるよう工夫する。 ○協働的な活動の重視 グループ活動等を積極的に取り入れ、意見交換を通じて思考を深めたり広げたりさせる。	生徒の主体的な学びを促進するため、多様な視点を提供し、話し合い活動を活用する。学習の選択肢を広げたり、単元ごとの課題を明示したりするなどして、思考の深化を促す。 ○学習計画の共有 単元の学習計画を生徒と共有して、学習の目標や展開を意識させ、学習の見通しをもたせる。 ○学習課題の工夫 単元の最初に生徒に問いを設定させたり、生徒が疑問を抱きやすい問いを提示したりするなど、学習課題を工夫し、考えを深めさせる。 ○表現活動の重視 表現活動の機会を増やし、対話を通じて他者の意見に触れる環境を整える。 ○学習の進め方の工夫 目標実現に向けた複数の方法を示し、生徒が自らに適した学習方法を選べるようにする。 ○多様な視点の提供 説明文分析の際、「叙述内容」「構成」「具体例」など複数の視点を示し思考を深めさせる。 ○主体的な学習の姿勢 自らの学習状況を把握させる場面を充実させ、自ら学習を改善できるようにさせる。 ○指導方法の定着 場当たり的な指導ではなく継続的な実践を通じ、学校の実態に応じた指導方法として確立する。 ○生徒の自主性の尊重 教師の介入を必要最小限に抑え、自主的に考える機会を増やす。 ○対話しやすい環境の整備 目的や必要に応じて相手を選ばせるなど、対話しやすい環境を整備する。

3-3-2 「2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について」

小学校	中学校
音読や語彙に関する学習を継続的に取り入れ、言葉に対する理解を深めさせ、読むことや書くことの力に生かす。読書活動を推奨したり、多様な読書活動を促したりして本や文章を流暢に読む力の育成を図る。 ○継続的な音読 低学年での毎朝の音読や、音読の繰り返しを取り入れ、児童が文章を流暢に読めるよう、計画的に取り組む。 ○語彙指導の重視 授業で出会った語彙を「言葉のコレクション」として記録させ、様々な場で積極的に活用させるよう促す。また、文脈を通じた語彙の習得を促し、文章を正確に読めるようにするとともに、適切な表現力の育成につなげる。 ○ICTを活用した語彙指導 一人一台端末の辞書機能を活用し、新しい語彙の習得を支援する。	音読・朗読を通じて文章の意味理解を促し、ICT活用も含めた語句の理解を図り、語彙を豊かにする。多様な本や文章を読む読書活動を推進し、文章を流暢に読んで考えを形成する力の育成を図る。 ○継続的な音読・朗読 音読・朗読の指導を充実させることによって、生徒が文章を流暢に読めるよう、計画的に取り組む。 ○語彙指導の重視 学習した語句の定着状況をきめ細やかに確認することで、意味を理解している語句の数を増やす。また、「要約」「要旨」など当該学習課題と関わりの深い語句を定義するなどして意識させる。 ○ICTを活用した語彙指導 クイズ形式のICTによる語彙学習ツールを活用し、ゲーム感覚なども取り入れながら語彙の習得を促進する。

○読書活動の推奨・促進 学校図書館を積極的に活用させ、児童が読書に親しむ機会を増やす。また、クラスで同じ本を読み、読書会での意見交換を行わせる。	○多様な読書活動の導入 教科書教材と関連したテーマに関する様々な立場や考え方が書かれている本を幅広く読むことで楽しみながら学習を進められるようにする。
--	---

3-3-3 「3. 学習評価について」

小学校	中学校
形成的な評価を重視し、学習の進捗状況を可視化して、学習の質や学習意欲の向上を図る。振り返りシート等を活用し、児童が自ら学びを振り返る機会を増やす。 ○形成的な評価の重視 授業中の発言やノートの記述内容を例えば4段階で評価するなどし、教師が学習状況を把握するとともに、子供たちにも毎回フィードバックする。 ○学習目標の明示 「こういうことができるようになる」といいよね」などの言葉掛けを行ったり、単元の最初に児童が理解できる言葉で学習の目標を示したりして、児童が目標を把握できるようにするとともに、振り返りをしやすくさせる。 ○児童に対するフィードバックの工夫 児童の発言や記述に対して具体的なコメントを加え、必要に応じて学習の改善に取り組めるようにする。 ○ICTの活用 一人一台端末を使うなどして、学習したことを記録し、学習の進捗状況を児童自身が整理する習慣を育てる。 ○学習の振り返りの充実 「学びの自治力」というフレーズを使うなどして、自覚的に自己評価を行い、学びの成果を実感させるとともに、学習の改善に取り組めるようにする。	評価規準の明示や記述課題、ICTを活用した振り返りを通じて生徒の学習状況を把握する。また、評価の観点を明確に示すことで、生徒による自己評価等の評価を充実させ、教師による評価の参考とする。 ○形成的な評価の重視 「Bと判断する状況」の具体的な想定により、記述式の課題や話し合い活動での発言内容、振り返りシート、授業中の発言などを基に適切に学習状況を把握し、必要に応じて学習の改善を促す。 ○生徒の自己評価の活用 評価の観点を具体的に分かりやすく示すことで生徒に学習の目標を理解させた上で、観点に基づいて学習活動としての自己評価を行わせ、学びの成果を実感させるとともに、教師による評価の参考とする。 ○ICTの活用 学習ソフトのアンケート機能を使うなどして、比較的容易に自らの学習状況を把握させ、学習改善のポイントを自覚させ、教師による評価の参考とする。 ○グループ活動での振り返り グループ活動ではICTを活用して活動状況の記録を残し、記録を基に自分の学習状況について具体的に振り返らせるとともに、教師による評価の参考とする。

3-3-4 「4. 国語科におけるICTの活用について」

小学校	中学校
一人一台端末や電子黒板、辞書・録音機能などを活用し、学習状況の可視化や意見の共有、自主的な学習を促進するとともに、協働的な学びや個別最適な学びが図られるよう、効果的な学習支援を行う。 ○文章構造の可視化 電子黒板や一人一台端末を通して文章構造を可視化し、抽象的な思考の支援を行う。 ○学びの蓄積 一人一台端末を意見交換やプレゼンテーション資料の作成だけでなく、自主学習ノートや読書ノートとしても活用し、個人での学習の深化を図る。 ○協働的な学習 シンキングツールや発表ツールをアプリで使うなどして、一人一台端末を活用しながら、児童の意見交換を活性化させる。	一人一台端末や電子黒板、生成AIや辞書機能を活用して、語彙の習得や思考の整理を行わせたり、ポスターセッションやクラウドでの意見共有を行わせたりして、学習の充実を図る。 ○情報機器の連携的活用 一人一台端末と電子黒板、さらにホワイトボード等を連携させ、文章構造の把握や思考の整理、語彙に関する学習などを効果的に行う。 ○生成AIの活用 生成AIを活用した、家庭と学校の学びの好循環を創出する取組等を実施し、生成AIの適切で効果的な活用を学び合う。 ○情報の整理 一人一台端末等を用いたポスターセッションを繰り返すなどして、図や絵、記号などを用い

○辞書機能の活用 紙の辞書とともにICTの辞書機能を活用し、児童が自主的に語彙を学習する環境を整える。 ○共同編集 全てのソフトを同じ仕様に統一することで、個人の作成した文書を、スムーズにクラウド上で児童同士が意見を共有しながら学習する。 ○録音機能の活用 自分の音読を録音・再生し、発音や抑揚を改善する。	ながら情報を整理して考えを伝える力を養う ○辞書機能の活用 ICTを活用して語句の意味などを調べ、言葉の理解を深める。 ○クラウド機能による意見の共有 「読むこと」の単元のはじめに文章に対する疑問や考えたいことをクラウド上に挙げさせたり、活動中に生徒相互にクラウドに助言や気づきを示させたりして、意見を共有しながら学習を進める。
--	---

3-3-5 「5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について」

小学校	中学校
読書活動の推進や語彙に関する学習、地域の図書館との連携、ICTを活用した文集作りなどを通じて、読むことの力や表現力を高めるとともに、読書習慣の定着や語彙の習得を促す。 ○読書活動の推進 冊数を競うのではなく幅広い読書を目指した全校読書活動を行うなどして、読書への関心を高め、習慣化する取組を行う。 ○表現活動の充実 一人一台端末とクラウドを活用し、学びのまとめとしての文集づくりを児童自らが協働しながら執筆、推敲、編集、共有できるようにする。 ○地域との連携 公共図書館や学校図書館を活用し、地域の本を教材にして学習を深める。 ○語彙指導の充実 「言葉のコレクション」など、複数の用例を集めて比較し、共通する使い方を抽出する活動等を行わせ、児童の語彙の習得と活用を図る。 ○身近な話題の活用 教科書教材に加え、実生活に関連した文章を教材にし、読むことの力を高める。	読書環境の整備や図書館の活用を通じた読書活動の推進、学習課題や学習方法の選択肢の提示、言葉への意識の喚起、デジタルと併用したアナログな教具の活用を通して、生徒の主体的な学びの充実や、読むことの力、表現力の育成を図る。 ○読書活動の推進 教室内に必要な読書環境を整えたり、公共図書館や学校図書館を活用する時間を多く設けるなどして、読書活動を推進する。 ○学習に関する選択肢の提示 学習課題や学習方法に選択肢を設け、生徒の興味・関心や習熟度に合わせて、生徒が自分事として学習を深めようとする意識を高める。 ○言葉への意識の喚起 例えば敬語やインターネット上でふれている言葉など日常使用する言葉に意識を向けて考えさせるようにしたり、文章教材と日常生活の言葉とを関連させるように促したりするなどして、言葉へのこだわりをもつよう意識の喚起を図る。 ○アナログな教具の活用 中学生であっても漢字や語句などに関する物理的なカードや掲示には興味・関心をもつため、デジタルと併用しながら使用する。

3-3-6 「6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について」

小学校	中学校
成果物の協働的な作成を通じた対話づくり、学力向上支援、図や画像等の活用、他教科等と連携した発表、教員の多様な研修の実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。 ○対話が生まれる機会の設定 俳句づくりや文集づくりなど様々な協働的な活動の機会を設け、その中で児童同士が自然と議論し多様な意見を交流できるよう工夫する。 ○自己表現の支援 学力向上に関する専門職員やチームティーチングの教員など様々な人々が関わっていくことで、児童が安心して意見を発表できる環境を整える。	生徒の対話の重視、図や画像等の活用、地域で一貫した教科指導の実施、教科等を越えた日常的な指導の連携、単元テストの実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。 ○教師の発言の抑制による対話の重視 教師の発言を必要最低限にとどめ、できるだけ多くの時間を生徒同士の対話に充てることで、生徒同士が多様な意見に触れられるようにし、思考の広がりや深まりを促す。 ○図や画像等の活用 どの授業においても表現活動が重視されており、その際には話や文章に加え、図や写真などを活用することで多様な思考力を育成する。

○図や画像等の共有と活用 教師と児童とで共有された写真や図などを用い、学習活動への興味・関心を高める。 ○他教科等と連携した学習 多くの国語科の授業が他教科や総合的な学習の時間等と連携しており、そのような中で成果を発表する機会を設け、表現力を育てる。 ○様々な形での教員研修 教員の個人設定課題、教員全員による交流授業、教師が個人の研究を短時間で発表するミニ研修など、様々な形の教員研修を複合的にを行い、教育効果を共有したり高めたりする。	○地域で一貫した教科指導の実施 小学校と合同の研修会を定期的に開催し、小中が連携した教科指導を行うことで、学習履歴を踏まえた教科指導を行うとともに、地域で一貫した教育方針に基づいた指導を行う。 ○日常的な指導の連携 教科等を超えて教員同士が単元の内容や展開、指導上の工夫、ICTの活用法など情報を共有したり、助言し合ったりする。 ○単元テスト等の工夫 定期テストの代わりに、一単位時間や単元中の評価、単元テストなどを行い、それらを総合して評価するなどの工夫により、学習の確実な定着を図る。
--	---

3-4 訪問調査校の追加情報

本節では、訪問調査対象校における令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について、国語および算数（数学）の総合得点および問題形式別（選択式・短答式・記述式）の平均正答率を示す。さらに、全国平均との比較を通じて、訪問調査校の学力的特徴を明らかにする。

表3-1の結果から、訪問調査校は国語および算数において、全国平均を上回る平均正答率を示していることが確認された。特に問題形式別にみると、選択式・短答式よりも記述式問題における正答率の向上幅が大きく、記述力や論理的表現力に関わる学力が相対的に高いことが示唆される。

表3-1 訪問調査校（小学校）における令和5年度全国学力・学習状況調査の平均正答率

学校	国語				算数			
	合計点	選択式	短答式	記述式	合計点	選択式	短答式	記述式
A 小学校	76.4 (+9.0)	80.0 (+8.7)	63.6 (+0.1)	77.8 (+5.0)	78.1 (+4.4)	73.3 (+15.4)	85.7 (+10.8)	59.1 (+11.5)
B 小学校	75.5 (+8.1)	74.5 (+3.2)	70.5 (+7.0)	82.8 (+10.0)	70.2 (+7.5)	64.5 (+6.6)	81.8 (+6.9)	56.8 (+9.2)
C 小学校	72.6 (+5.2)	77.3 (+6.0)	71.6 (+8.1)	71.2 (-1.6)	66.2 (+3.5)	60.0 (+2.1)	75.7 (+0.8)	57.4 (+9.8)
D 小学校	71.5 (+4.1)	74.6 (+3.3)	67.3 (+3.8)	78.2 (+5.4)	64.9 (+2.2)	57.0 (-0.9)	76.5 (+1.6)	54.3 (+6.7)
E 小学校	73.1 (+5.7)	74.4 (+3.1)	64.0 (+0.5)	77.5 (+4.7)	71.8 (+9.1)	67.9 (+10.0)	81.4 (+6.5)	59.9 (+12.3)
F 小学校	74.9 (+7.5)	77.0 (+5.7)	70.5 (+7.0)	85.8 (+13.0)	69.8 (+7.1)	69.5 (+11.6)	78.2 (+3.3)	55.3 (+7.7)
G 小学校	74.5 (+7.1)	76.1 (+4.8)	63.4 (-0.1)	87.5 (+14.7)	70.8 (+8.1)	67.9 (+10.0)	80.6 (+5.7)	57.1 (+9.5)
H 小学校	69.8 (+2.4)	75.5 (+4.2)	61.3 (-2.3)	72.5 (-0.3)	65.2 (+2.5)	60.5 (+2.6)	76.4 (+1.5)	51.3 (+3.7)
I 小学校	78.3 (+10.9)	78.9 (+7.6)	70.5 (+7.0)	88.2 (+15.4)	74.7 (+12.0)	72.4 (+14.5)	83.6 (+8.7)	61.7 (+14.1)
J 小学校	72.7 (+5.3)	74.2 (+2.9)	69.0 (+5.5)	83.5 (+10.7)	60.7 (-2.0)	53.4 (-4.5)	72.2 (-2.7)	49.7 (+2.1)
K 小学校	71.0 (+3.6)	69.2 (-2.1)	73.8 (+10.3)	76.9 (+4.1)	63.6 (+0.9)	59.1 (+1.2)	75.6 (+0.7)	48.1 (+0.5)
L 小学校	72.2 (+4.8)	69.4 (-1.9)	70.4 (+6.9)	85.0 (+12.2)	69.5 (+6.8)	66.1 (+8.2)	79.9 (+5.0)	55.6 (+8.0)
訪問調査校平均	73.5	78.8	67.7	61.5	68.5	64.3	79.0	55.5
全国平均	67.4	73.7	62.9	51.2	62.7	57.9	74.9	47.6
差	+6.1	+5.1	+4.8	+10.3	+5.8	+6.4	+4.1	+7.9

表3-2の結果においても、訪問調査対象の中学校は、国語および数学の総合得点で全国平均を上回っている。また、問題形式別に分析した結果、特に記述式問題において顕著な差が認められ、思考力・判断力・表現力等の育成に関わる学習成果が高く評価される学校であることが示唆される。

表3-2 訪問調査校（中学校）における令和5年度全国学力・学習状況調査の平均正答率

学校	国語				数学			
	合計点	選択式	短答式	記述式	合計点	選択式	短答式	記述式
A 中学校	75.7 (+5.6)	80.4 (+7.0)	66.3 (+0.3)	76.8 (+8.4)	61.5 (+10.1)	55.8 (+10.0)	71.5 (+8.6)	53.9 (+11.8)
B 中学校	82.4 (+12.3)	82.2 (+8.8)	79.6 (+13.6)	85.7 (+17.3)	65.8 (+14.4)	56.4 (+10.6)	77.0 (+14.1)	59.8 (+17.7)
C 中学校	78.4	79.4	74.8	80.2	61.0	53.0	72.0	54.3

	(+8.3)	(+6.0)	(+8.8)	(+11.8)	(+9.6)	(+7.2)	(+9.1)	(+12.2)
D 中学校	73.4 (+3.3)	78.6 (+5.2)	63.5 (-2.5)	74.3 (+5.9)	54.2 (+2.8)	46.5 (+0.7)	65.9 (+3.0)	46.3 (+4.2)
E 中学校	72.5 (+2.4)	73.0 (-0.4)	67.8 (+1.8)	76.3 (+7.9)	48.4 (-3.0)	45.1 (-0.7)	60.0 (-2.9)	37.2 (-4.9)
F 中学校	76.8 (+6.7)	78.5 (+5.1)	74.8 (+8.8)	75.7 (+7.3)	60.1 (+8.7)	55.5 (+9.7)	69.6 (+6.7)	52.3 (+10.2)
G 中学校	77.4 (+7.3)	76.4 (+3.0)	76.0 (+10.0)	80.6 (+12.2)	58.3 (+6.9)	52.3 (+6.5)	69.8 (+6.9)	49.4 (+7.3)
H 中学校	73.2 (+3.1)	74.2 (+0.8)	68.4 (+2.4)	76.4 (+8.0)	58.5 (+7.1)	60.9 (+15.1)	66.2 (+3.3)	47.4 (+5.3)
I 中学校	81.4 (+11.3)	81.5 (+8.1)	81.7 (+15.7)	80.8 (+12.4)	60.7 (+9.3)	54.2 (+8.4)	69.0 (+6.1)	55.8 (+13.7)
J 中学校	76.1 (+6.0)	79.2 (+5.8)	69.0 (+3.0)	78.0 (+9.6)	63.1 (+11.7)	57.8 (+12.0)	72.5 (+9.6)	55.9 (+13.8)
K 中学校	79.4 (+9.3)	84.1 (+10.7)	71.2 (+5.2)	79.5 (+11.1)	65.9 (+14.5)	59.4 (+13.6)	75.0 (+12.1)	60.3 (+18.2)
L 中学校	78.6 (+8.5)	80.7 (+7.3)	74.0 (+8.0)	79.7 (+11.3)	64.9 (+13.5)	55.7 (+9.9)	73.6 (+10.7)	61.7 (+19.6)
訪問調査 校平均	77.1	79.0	72.3	78.7	60.2	54.4	70.2	52.9
全国平均	70.1	73.4	66.0	68.4	51.4	45.8	62.9	42.1
差	7.0	5.6	6.3	10.3	8.8	8.6	7.3	10.8

以上の結果は、本調査で採用した訪問校の抽出基準が妥当かつ有効であったことを示している。また、訪問校における学力の特徴は、学校ごとの教育実践や学習環境が、国語・算数（数学）のいずれにおいても学力の向上に寄与している可能性を示唆している。

第4章 研究課題①「「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討」に係る訪問調査から得られた知見に関する総括

4-1 小学校に関する知見の総括

思考力、判断力、表現力等を育む対話や発表など表現活動の重視、ICTや学習評価の工夫、読書習慣や語彙習得を図る継続的な指導、地域や他教科等との連携、教員研修の充実など、学びの充実を図る多様な取組が認められる。

1. 「考えの形成」について

児童が主体的に考えを深める力を育むため、学習の目標や展開を明確に示し、発問や対話を通じて思考を促す。書く活動や、発表・スピーチ等の機会を増やしたりするなど、自分の考えを表現する多様な活動を取り入れる。

2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について

音読や語彙に関する学習を継続的に取り入れ、言葉に対する理解を深めさせ、読むことや書くことの力に生かす。読書活動を推奨したり、多様な読書活動を促したりして本や文章を流暢に読む力の育成を図る。

3. 学習評価について

形成的な評価を重視し、学習の進捗状況を可視化して、学習の質や学習意欲の向上を図る。振り返りシート等を活用し、児童が自ら学びを振り返る機会を増やし、教師による評価の参考とする。

4. 国語科におけるICTの活用について

一人一台端末や電子黒板、辞書・録音機能などを活用し、学習状況の可視化や意見の共有、自主的な学習を促進するとともに、協働的な学びや個別最適な学びが図られるよう、効果的な学習支援を行う。

5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について

読書活動の推進や語彙に関する学習、地域の図書館との連携、ICTを活用した文集作りなどを通じて、読むことの力や表現力を高めるとともに、読書習慣の定着や語彙の習得を促す。

6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

成果物の協働的な作成を通じた対話づくり、学力向上支援、図や画像等の活用、他教科等と連携した発表、教員の多様な研修の実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

4-2 中学校に関する知見の総括

多様な視点や対話を通じた思考の深化、語彙指導や読書指導、ICTの活用、明確な評価規準の設定や振り返りの工夫、教員間の連携や学習環境の整備など、学びの充実を図る多様な取組が認められる。

1. 「考えの形成」について

生徒の主体的な学びを促進するため、多様な視点を提供し、話し合い活動を活用する。学習の選択肢を広げたり、単元ごとの課題を明示したりするなどして、思考の深化を促す。

2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について

音読・朗読を通じて文章の意味理解を促し、ICT活用も含めた語句の理解を図り、語彙を豊かにする。多様な本や文章を読む読書活動を推進し、文章を流暢に読んで考えを形成する力の育成を図る。

3. 学習評価について

評価規準の明示や記述課題、ICTを活用した振り返りを通じて生徒の学習状況を把握する。また、評価の観点を明確に示すことで、生徒による自己評価等の評価を充実させ、教師による評価の参考とする。

4. 国語におけるICTの活用について

一人一台端末や電子黒板、生成AIや辞書機能を活用して、語彙の習得や思考の整理を行わせたり、ポスターセッションやクラウドでの意見共有を行わせたりして、学習の充実を図る。

5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について

読書環境の整備や図書館の活用を通じた読書活動の推進、学習課題や学習方法の選択肢の提示、言葉への意識の喚起、デジタルと併用したアナログな教具の活用を通して、生徒の主体的な学びの充実や、読むことの力、表現力の育成を図る。

6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

生徒の対話の重視、図や画像等の活用、地域で一貫した教科指導の実施、教科等を超えた日常的な指導の連携、単元テストの実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

第5章 研究課題②「「C読むこと」における各学習過程に関する特徴的な結果の抽出」に係る研究成果

本章では、「研究課題②「C読むこと」における各学習過程に関する特徴的な結果の抽出」に関する分析結果について述べる。

現行学習指導要領における「C読むこと」の学習過程である「構造と内容の把握」「精査・解読」「考えの形成、共有」について、国語の教科調査における該当設問を抽出し、設問間の相関関係の分析を行い、各資質・能力相互の関係性の程度を明らかにする。また、各該当設問と相関関係の高い「知識及び技能」の設問を抽出するとともに、質問調査についても相関関係の高い項目を明らかにする。

5-1 分析対象データの概要

学力調査もしくは学習状況に関する質問に参加した小学校6年生の児童、および中学校3年生の生徒のうち、国語の教科調査に参加したもののみを分析対象とした（以下、小学生は「児童」、中学生は「生徒」と称する）。分析対象の児童総数は978,322名（令和6年度）、992,623名（令和5年度）で、分析対象の生徒総数は910,414名（令和6年度）、929,799名（令和5年度）であった。対象の児童、生徒の学校の設置者別、地域規模別の割合は以下のとおりである（表5-1-1、表5-1-2）。（第6章、第7章においても、特に断らない限り、同データを用いる。）

表5-1-1 令和6年度調査の分析対象の児童・生徒の学校の設置者別の割合（%）

（令和6年度）

	児童	生徒
国立	0.6	1.0
公立	98.7	96.8
私立	0.7	2.1
計	100.0	100.0

（令和5年度）

	児童	生徒
国立	0.6	1.0
公立	98.7	96.6
私立	0.7	2.4
計	100.0	100.0

表5-1-2 令和6年度調査の分析対象の児童・生徒の学校の地域規模別の割合（%）

（令和6年度）

	児童	生徒
大都市	8.2	8.6
中核市	40.2	41.5
その他の市	23.3	23.8
町村	28.4	26.1
計	100.0	100.0

（令和5年度）

	児童	生徒
大都市	8.2	8.6
中核市	40.5	41.9
その他の市	23.4	23.6
町村	27.8	25.9
計	100.0	100.0

5-2 分析方法

分析には主に統計ソフト SPSS Version 28.0.1.1 を使用した。すべてのデータにつき、分析の前に以下のように処理した。

- ・正答数、正答率の計算の際は無回答を誤答として処理した。
- ・児童質問や学校質問への回答については、順序尺度として扱えるものは順序尺度となるよう、無回答や「その他」のほか、順序として扱えない回答はデータから除外し、すべての回答について、数値の大きいものがよりプラスの価値もしくはより大きい数値を表す回答となるよう、そうになっていない回答には-1 を乗じたうえで、選択肢の数に応じて、最小の数値が 1 となるように修正した。

その後、主に以下の分析を行った。

- ・試験の各設問間および試験の正答数との相関
- ・試験問題と児童回答質問、学校回答質問の相関

分析は令和 6 年度の問題を中心に行うが、令和 5 年度の問題についても、同様の傾向があるかどうかを確認するために必要に応じて分析を行う。

なお、本章以下、第 7 章までは、設問の番号を以下の通り表記する（表 5-2-1、5-2-2、5-2-3、5-2-4）。

表 5-2-1 令和 6 年度小学校国語問題の設問番号と本稿の記述の対応

設問番号	国語_1 一	国語_1 二 (1)	国語_1 二 (2)	国語_1 三	国語_2 一 (1)	国語_2 一 (2)	国語_2 二
本稿での表記	01	02	03	04	05	06	07
設問番号	国語_2 三ア	国語_2 三イ	国語_3 一	国語_3 二 (1)	国語_3 二 (2)	国語_3 三	国語_3 四
本稿での表記	08	09	10	11	12	13	14

表 5-2-2 令和 6 年度中学校国語問題の設問番号と本稿の記述の対応

設問番号	国語_1 一	国語_1 二	国語_1 三	国語_1 四	国語_2 一	国語_2 二	国語_2 三	国語_2 四
本稿での表記	01	02	03	04	05	06	07	08
設問番号	国語_3 一	国語_3 二	国語_3 三	国語_3 四	国語_4 一	国語_4 二	国語_4 三	
本稿での表記	09	10	11	12	13	14	15	

表 5-2-3 令和 5 年度小学校国語問題の設問番号と本稿の記述の対応

設問番号	国語_1 一	国語_1 二	国語_1 三 (1) ア	国語_1 三 (1) ウ	国語_1 三 (2) イ	国語_1 四	国語_2 一
本稿での表記	01	02	03	04	05	06	07
設問番号	国語_2 二	国語_2 三	国語_2 四	国語_3 一 (1)	国語_3 一 (2)	国語_3 二	国語_3 三
本稿での表記	08	09	10	11	12	13	14

表 5-2-4 令和 5 年度中学校国語問題の設問番号と本稿の記述の対応

設問番号	国語_1 一	国語_1 二	国語_1 三	国語_1 四	国語_2 一	国語_2 二	国語_2 三	国語_2 四
本稿での表記	01	02	03	04	05	06	07	08
設問番号	国語_3 一	国語_3 二	国語_3 三	国語_3 四	国語_4 一	国語_4 二	国語_4 三	
本稿での表記	09	10	11	12	13	14	15	

5-3-1 「読むこと」に関する設問にみる内容および問題形式の関係（令和6年度）

令和6年度調査の小学校国語において、「C読むこと」に位置付けられた設問は11、12、13の3問である。

設問11「「オニグモじいさん」が「ハエの女の子」にどのように話すか迷っていると考えられるところとして、適切なものを選択する」（登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる）は「構造の内容と把握」に関する設問であり、設問12「【話し合いの様子】で、原さんが【物語】の何に着目したのかについて説明したものとして、適切なものを選択する」（人物像を具体的に想像することができるかどうかをみる）と設問13「【物語】を読んで、心に残ったところとその理由をまとめて書く」（人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる）は「精査・解釈」に関する設問である。

なお、設問11と設問12は選択式設問であり、設問13は記述式設問である。

中学校国語においては、「C読むこと」に関する設問は05、07、08、14の4問で、設問07「本文中に示されている二つの例の役割をまとめた文の空欄に入る言葉として適切なものをそれぞれ選択する」（文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることができるかどうかをみる）と設問14「短歌に詠まれている情景の時間帯の違いを捉え、時間の流れに沿って短歌の順番を並べ替える」（短歌の内容について、描写を基に捉えることができるかどうかをみる）が「構造と内容の把握」に関する設問であり、設問05「本文中の図の役割を説明したものとして適切なものを選択する」（文章と図を結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することができるかどうかをみる）、設問08「本文に書かれていることを理解するために、着目する内容を決めて要約する」（目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる）が「精査・解釈」の設問である。

小学校国語、中学校国語のいずれにおいても、令和6年度「C読むこと」に関する「考えの形成、共有」に関する設問は出題されていない。

まず、「C読むこと」における同じ学習過程の異なる問題形式間の正答率の相関について分析を行った（表5-3-1、5-3-2）。

小学校国語については、同じ「精査・解釈」に関する設問である設問12（選択式）と設問13（記述式）の相関は $r=.195$ で、他の設問との相関と比べて高いとは言えない。一方、小学校国語の「構造と内容の把握」に関する設問である設問11（選択式）と「精査・解釈」に関する設問12（選択式）の相関は $r=.227$ 、「精査・解釈」に関する設問13（記述式）との相関は $r=.219$ で、他の設問との相関と比べて相対的に高かった。つまり、この調査に限って言えば、文学的な文章を読むことにおいて、登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができることと、人物像を具体的に想像できたり、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることとの間には一定程度の関係があると考えられる。

中学校国語では同じ「精査・解釈」に関する設問である05（選択式）と08（記述式）の相関は $r=.238$ と、他の設問との相関と比べて相対的に高いが、「構造と内容の把握」に関する設問07（選択式）と設問14（短答式）の相関は $r=.148$ しかなく、高くはない。しかし、この「構造と内容の把握」に関する設問である設問07（選択式）と「精査・解釈」に関する設問08（記述式）の相関は $r=.219$ で、他の設問との相関と比べて相対的に高かった。これら2問は同じ大問の中で連続した順序に位置付けられている。この調査に限って言えば、説明的な文章を読むことにおいて、文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることと、目的に応じて必要な情報に着目して要約することとの間には一定程度の関係があると考えられる。

表 5-3-1 令和 6 年度小学校国語調査における設問間、及び各設問と正答数の相関(ρ)

学習指導要領の内容		A	(1)	A	A	B	(2)	B	(1)	(1)	(1)	C構	C精	C精	(3)
学習指導要領の内容	正答数	国語 01	国語 02	国語 03	国語 04	国語 05	国語 06	国語 07	国語 08	国語 09	国語 10	国語 11	国語 12	国語 13	国語 14
正答数	1	0.464	0.498	0.448	0.520	0.486	0.463	0.406	0.530	0.505	0.475	0.506	0.448	0.512	0.578
A 国語 01	0.464	1	0.220	0.149	0.234	0.172	0.152	0.109	0.175	0.151	0.153	0.165	0.118	0.134	0.182
(1) 国語 02	0.498	0.220	1	0.221	0.230	0.200	0.209	0.124	0.181	0.174	0.172	0.186	0.150	0.166	0.217
A 国語 03	0.448	0.149	0.221	1	0.256	0.156	0.133	0.103	0.161	0.133	0.144	0.149	0.101	0.110	0.152
A 国語 04	0.520	0.234	0.230	0.256	1	0.192	0.183	0.126	0.200	0.175	0.183	0.207	0.146	0.151	0.215
B 国語 05	0.486	0.172	0.200	0.156	0.192	1	0.293	0.131	0.176	0.187	0.173	0.196	0.160	0.183	0.236
(2) 国語 06	0.463	0.152	0.209	0.133	0.183	0.293	1	0.130	0.169	0.195	0.163	0.181	0.171	0.184	0.237
B 国語 07	0.406	0.109	0.124	0.103	0.126	0.131	0.130	1	0.145	0.144	0.117	0.121	0.104	0.189	0.155
(1) 国語 08	0.530	0.175	0.181	0.161	0.200	0.176	0.169	0.145	1	0.349	0.193	0.200	0.137	0.225	0.239
(1) 国語 09	0.505	0.151	0.174	0.133	0.175	0.187	0.195	0.144	0.349	1	0.177	0.182	0.149	0.238	0.240
(1) 国語 10	0.475	0.153	0.172	0.144	0.183	0.173	0.163	0.117	0.193	0.177	1	0.131	0.173	0.177	0.239
C構 国語 11	0.506	0.165	0.186	0.149	0.207	0.196	0.181	0.121	0.200	0.182	0.131	1	0.227	0.219	0.276
C精 国語 12	0.448	0.118	0.150	0.101	0.146	0.160	0.171	0.104	0.137	0.149	0.173	0.227	1	0.195	0.257
C精 国語 13	0.512	0.134	0.166	0.110	0.151	0.183	0.184	0.189	0.225	0.238	0.177	0.219	0.195	1	0.353
(3) 国語 14	0.578	0.182	0.217	0.152	0.215	0.236	0.237	0.155	0.239	0.240	0.239	0.276	0.257	0.353	1

*すべて $p < .001$

*太字の数値は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

*学習指導要領の内容は(1)～(3)が「知識及び技能」：(1)＝言葉の使い方や特徴に関する事項、(2)＝情報の扱い方に関する事項、(3)＝我が国の言語文化に関する事項で、A～C が「思考力、判断力、表現力等」：A＝話すこと・聞くこと、B＝書くこと、C＝読むことである。さらにCのうち、「C 講」＝構造と内容の把握、「C 精」＝精査・解釈である。

表 5-3-2 令和 6 年度中学校国語調査における設問間、及び各設問と正答数の相関(ρ)

学習指導要領の内容		A	A	(2)	A	C精	(2)	C構	C精	B	(1)	(1)	B	(1)	C構	(3)
学習指導要領の内容	正答数	国語01	国語02	国語03	国語04	国語05	国語06	国語07	国語08	国語09	国語10	国語11	国語12	国語13	国語14	国語15
正答数	1	0.405	0.480	0.382	0.467	0.472	0.444	0.500	0.597	0.454	0.473	0.564	0.567	0.449	0.415	0.457
A 国語01	0.405	1	0.213	0.194	0.096	0.128	0.119	0.130	0.166	0.122	0.116	0.154	0.133	0.101	0.098	0.100
A 国語02	0.480	0.213	1	0.126	0.164	0.182	0.162	0.183	0.234	0.167	0.165	0.219	0.211	0.139	0.133	0.141
(2) 国語03	0.382	0.194	0.126	1	0.105	0.130	0.100	0.102	0.166	0.085	0.122	0.128	0.133	0.100	0.093	0.085
A 国語04	0.467	0.096	0.164	0.105	1	0.162	0.155	0.185	0.254	0.157	0.148	0.223	0.246	0.129	0.116	0.148
C精 国語05	0.472	0.128	0.182	0.130	0.162	1	0.158	0.178	0.238	0.148	0.163	0.208	0.218	0.150	0.133	0.151
(2) 国語06	0.444	0.119	0.162	0.100	0.155	0.158	1	0.188	0.216	0.181	0.136	0.209	0.199	0.145	0.116	0.166
C構 国語07	0.500	0.130	0.183	0.102	0.185	0.178	0.188	1	0.270	0.210	0.162	0.240	0.231	0.154	0.148	0.187
C精 国語08	0.597	0.166	0.234	0.166	0.254	0.238	0.216	0.270	1	0.210	0.233	0.306	0.328	0.203	0.186	0.208
B 国語09	0.454	0.122	0.167	0.085	0.157	0.148	0.181	0.210	0.210	1	0.221	0.224	0.209	0.147	0.123	0.189
(1) 国語10	0.473	0.116	0.165	0.122	0.148	0.163	0.136	0.162	0.233	0.221	1	0.213	0.205	0.166	0.136	0.152
(1) 国語11	0.564	0.154	0.219	0.128	0.223	0.208	0.209	0.240	0.306	0.224	0.213	1	0.312	0.199	0.171	0.237
B 国語12	0.567	0.133	0.211	0.133	0.246	0.218	0.199	0.231	0.328	0.209	0.205	0.312	1	0.192	0.166	0.217
(1) 国語13	0.449	0.101	0.139	0.100	0.129	0.150	0.145	0.154	0.203	0.147	0.166	0.199	0.192	1	0.137	0.203
C構 国語14	0.415	0.098	0.133	0.093	0.116	0.133	0.116	0.148	0.186	0.123	0.136	0.171	0.166	0.137	1	0.154
(3) 国語15	0.457	0.100	0.141	0.085	0.148	0.151	0.166	0.187	0.208	0.189	0.152	0.237	0.217	0.203	0.154	1

*すべて $p < .001$

*太字の数値は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

*学習指導要領の内容は(1)～(3)が「知識及び技能」：(1)＝言葉の使い方や特徴に関する事項、(2)＝情報の扱い方に関する事項、(3)＝我が国の言語文化に関する事項で、A～C が「思考力、判断力、表現力等」：A＝話すこと・聞くこと、B＝書くこと、C＝読むことである。さらにCのうち、「C 講」＝構造と内容の把握、「C 精」＝精査・解釈である。

とはいえ、令和 6 年度調査において、設問のカテゴリーや設問形式の異同と相関係数の間に特別な関係は特になく思われる。むしろ、個別の設問の内容による影響の方が強いと考えられる。

ただ、「C 読むこと」の設問において記述式設問は、選択式や短答式と比べて、他の設問との相関が相対的に高くなる傾向があり、全体の正答数との相関も 0.5 を超えている。記述式設問には、国語力の多様な要素が、他の形式の設問より多く含まれる可能性がある。この点については、令和 5 年度調査の結果と併せて後述する。

5-3-2 「読むこと」に関する設問にみる内容および問題形式の関係（令和 5 年度）

一方、令和 5 年度調査の設問間、及び各設問と正答数の相関は以下の通りである（表 5-3-3、5-3-4）。

表 5-3-3 令和 5 年度小学校国語調査における設問間、及び各設問と正答数の相関(r)

	学習指導要領の内容	(2)	B	(1)	(1)	(1)	(1)	C精	C精	(2)	C考	A	A	A	(1)
学習指導要領の内容	正答数	国01	国02	国03	国04	国05	国06	国07	国08	国09	国10	国11	国12	国13	国14
(2)	国01	0.414	1	0.120	0.137	0.154	0.096	0.150	0.131	0.148	0.107	0.119	0.165	0.160	0.113
B	国02	0.413	0.120	1	0.150	0.165	0.086	0.123	0.122	0.156	0.108	0.170	0.161	0.164	0.126
(1)	国03	0.496	0.137	0.150	1	0.283	0.138	0.150	0.162	0.181	0.128	0.160	0.210	0.212	0.161
(1)	国04	0.548	0.154	0.165	0.283	1	0.202	0.197	0.225	0.201	0.151	0.209	0.254	0.259	0.223
(1)	国05	0.351	0.096	0.086	0.138	0.202	1	0.177	0.184	0.131	0.099	0.116	0.156	0.155	0.129
(1)	国06	0.443	0.150	0.123	0.150	0.197	0.177	1	0.204	0.163	0.121	0.146	0.201	0.204	0.149
C精	国07	0.465	0.131	0.122	0.162	0.225	0.184	0.204	1	0.234	0.185	0.168	0.241	0.253	0.175
C精	国08	0.501	0.148	0.156	0.181	0.201	0.131	0.163	0.234	1	0.209	0.162	0.229	0.237	0.147
(2)	国09	0.428	0.107	0.108	0.128	0.151	0.099	0.121	0.185	0.209	1	0.118	0.180	0.182	0.114
C考	国10	0.486	0.119	0.170	0.160	0.209	0.116	0.146	0.168	0.162	0.118	1	0.207	0.210	0.245
A	国11	0.607	0.165	0.161	0.210	0.254	0.156	0.201	0.241	0.229	0.180	0.207	1	0.611	0.255
A	国12	0.614	0.160	0.164	0.212	0.259	0.155	0.204	0.253	0.237	0.182	0.210	0.611	1	0.269
A	国13	0.500	0.113	0.126	0.161	0.223	0.129	0.149	0.175	0.147	0.114	0.245	0.255	0.269	1
(1)	国14	0.461	0.115	0.111	0.160	0.180	0.104	0.124	0.136	0.144	0.105	0.139	0.225	0.231	0.219

*すべて $p < .001$

*太字の数値は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

*学習指導要領の内容は(1)～(3)が「知識及び技能」：(1)＝言葉の使い方や特徴に関する事項、(2)＝情報の扱い方に関する事項、(3)＝我が国の言語文化に関する事項で、A～Cが「思考力、判断力、表現力等」：A＝話すこと・聞くこと、B＝書くこと、C＝読むことである。さらにCのうち、「C 講」＝構造と内容の把握、「C 精」＝精査・解釈、「C 考」＝考えの形成」である。

表 5-3-4 令和 5 年度中学校国語調査における設問間、及び各設問と正答数の相関(r)

	学習指導要領の内容	A	(2)	A	A	(1)	C精	C構	C考	B	(1)	(2)	B	(3)	(3)	C精
学習指導要領の内容	正答数	国01	国02	国03	国04	国05	国06	国07	国08	国09	国10	国11	国12	国13	国14	国15
A	国01	0.384	1	0.112	0.175	0.185	0.167	0.121	0.182	0.169	0.133	0.090	0.193	0.188	0.153	0.187
(2)	国02	0.338	0.112	1	0.141	0.100	0.090	0.109	0.111	0.102	0.119	0.084	0.130	0.113	0.101	0.107
A	国03	0.467	0.175	0.141	1	0.196	0.166	0.184	0.215	0.200	0.179	0.131	0.246	0.214	0.181	0.209
A	国04	0.552	0.185	0.1	0.196	1	0.191	0.202	0.269	0.347	0.186	0.160	0.323	0.345	0.263	0.287
(1)	国05	0.399	0.167	0.09	0.166	0.191	1	0.181	0.206	0.171	0.149	0.118	0.213	0.203	0.178	0.199
C精	国06	0.511	0.121	0.109	0.184	0.202	0.181	1	0.248	0.218	0.221	0.168	0.285	0.238	0.195	0.218
C構	国07	0.555	0.182	0.111	0.215	0.269	0.206	0.248	1	0.270	0.225	0.167	0.322	0.288	0.237	0.281
C考	国08	0.569	0.169	0.102	0.2	0.347	0.171	0.218	0.270	1	0.208	0.163	0.326	0.323	0.255	0.285
B	国09	0.508	0.133	0.119	0.179	0.186	0.149	0.221	0.225	0.208	1	0.171	0.286	0.239	0.196	0.22
(1)	国10	0.435	0.09	0.084	0.131	0.16	0.118	0.168	0.167	0.163	0.171	1	0.219	0.187	0.184	0.169
(2)	国11	0.656	0.193	0.13	0.246	0.323	0.213	0.285	0.322	0.326	0.286	0.219	1	0.400	0.300	0.353
B	国12	0.615	0.188	0.113	0.214	0.345	0.203	0.238	0.288	0.323	0.239	0.187	0.400	1	0.286	0.352
(3)	国13	0.516	0.153	0.101	0.181	0.263	0.178	0.195	0.237	0.255	0.196	0.184	0.300	0.286	1	0.285
(3)	国14	0.58	0.187	0.107	0.209	0.287	0.199	0.218	0.281	0.285	0.22	0.169	0.353	0.352	0.285	1
C精	国15	0.611	0.159	0.113	0.207	0.311	0.177	0.259	0.272	0.311	0.25	0.207	0.379	0.356	0.266	0.326

*すべて $p < .001$

*太字の数値は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

*学習指導要領の内容は(1)～(3)が「知識及び技能」：(1)＝言葉の使い方や特徴に関する事項、(2)＝情報の扱い方に関する事項、(3)＝我が国の言語文化に関する事項で、A～Cが「思考力、判断力、表現力等」：A＝話すこと・聞くこと、B＝書くこと、C＝読むことである。さらにCのうち、「C 講」＝構造と内容の把握、「C 精」＝精査・解釈、「C 考」＝考えの形成」である。

令和 5 年度調査の小学校国語において、「C 読むこと」に位置付けられた設問は 07、08、10 の 3 問である。

設問 07「【資料 1】と【資料 2】に書かれている内容として適切なものを選択する」(目的を意識して意識して中心となる語や文を見つけて要約することができるかどうかをみる)、設問 08「【相田さんのメモ】の空欄に当てはまる内容として適切なものを選択する」(目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる)は「精査・解釈」に関する設問である。また、設問 10「資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く」(文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる)は「考えの形成」に関する設問である。

なお、設問 07 と設問 08 は選択式設問であり、設問 10 は記述式設問である。

中学校国語においては、「C 読むこと」に関する設問は 06、07、08、15 の 4 問である。

設問 07「それぞれの文章で述べられている「読書の楽しみ」として適切なものを選択する」（文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握することができるかどうかをみる）が「構造と内容の把握」に関する設問、設問 06「二つの文章に共通する表現の効果を説明したものとして適切なものを選択する」（観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えることができるかどうかをみる）と設問 15「現代語で書かれた「竹取物語」のどこがどのように工夫されているかについて、古典と比較して書く」（文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる）が「精査・解釈」に関する設問である。また、設問 08「自分がこれからどのように本を読んでいきたいかについて、読んだ文章を参考にして、知識や経験に触れながら書く」（文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができるかどうかをみる）が「考えの形成」に関する設問である。

なお、設問 06 と設問 07 は選択式設問であり、設問 08 と設問 15 は記述式設問である。

令和 5 年度の小学校国語調査の「C 読むこと」に位置付けられた設問のうち、同じ「精査・解釈」に関する設問である設問 07（選択式）と設問 08（選択式）の相関は $r=.234$ で、他の設問との相関と比べて相対的に高かった。つまり、この調査に限って言えば、複数の資料を読むことにおいて、目的を意識して意識して中心となる語や文を見付けて要約することと、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることとの間には一定程度の関係があると考えられる。一方、「精査・解釈」の 2 問（設問 07、設問 08）と「考えの形成」（設問 10）との相関は $r=.168$, $r=.162$ であり、相対的に低かった。

令和 5 年度の中学校国語調査の「C 読むこと」に位置付けられた設問のうち、「精査・解釈」に関する設問（設問 06、設問 15）、「構造と内容の把握」に関する設問（設問 07）、「考えの形成」に関する設問（設問 08）の間の相関はいずれも 0.2 以上で、相対的に高かった。この調査に限って言えば、文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握することと、観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えること、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること、文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることとの間には一定程度の関係があると考えられる。

なお、「考えの形成」に関する設問（設問 08）と「精査・解釈」に関する設問（設問 15）の相関は $r=.311$ と、相対的に高い。これら二つの設問は、位置付けられた大問が異なっているが、いずれも「考え」を書かせる記述式設問であるという点が共通している。

また、令和 5 年度調査には、「C 読むこと」の設問のうち、記述式問題が小学校に 1 問、中学校に 2 問あった。小学校の設問 10 と全体の正答数との相関は $r=.486$ で、特に高いということはないが、中学校の設問 08、設問 15 はいずれも全体の正答数との相関が相対的に高い（ $r=.569$, $r=.611$ ）。

5-4-1 「C 読むこと」に関する設問と「知識及び技能」に関する設問との関係（令和 6 年度）

「C 読むこと」に関する設問と「知識及び技能」に関する設問との関係について、令和 6 年度調査において最も顕著な傾向は、「知識及び技能」のうち、漢字を書く設問との相関がかなり高いということである。小学校国語の設問 08、設問 09（漢字を正しく書く設問を書く設問）は「C 読むこと」に関する 3 問中 2 問との相関が 0.2 を超え、全体の正答数との相関も 0.5 を超えている（表 5-3-1）。中学校国語の設問 11（文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる）も「C 読むこと」の 4 問中 3 問との相関が 0.2 を超え、全体の正答数との相関も 0.5 を超えている（表 5-3-2）。

ただし、「知識及び技能」に関する設問のうち、文の成分の順序や照応に関する設問と「C 読むこと」に関する設問との相関は必ずしも高いとはいえない。文の成分の順序や照応を問う中学校国語 10 は、相関が 0.2 を超えたのは、「C 読むこと」の 4 問中 1 問のみである。

5-4-2 「C 読むこと」に関する設問と「知識及び技能」に関する設問との関係（令和 5 年度）

一方、令和5年度調査についても分析してみたところ、漢字を書く問題の小学校の設問4（「意外」）、設問5（「期間」）と中学校の設問10（「推し量って」）のうち、小学校の設問4は他の多くの設問と相対的に高い相関があり、全体の正答数との相関も $r=.552$ と高いが、他の2問は特に高い相関はない。他の「知識及び技能」の設問との関係についても、「C読むこと」との関係については、特に一貫した相関の傾向はみられない。

5-5-1 「C読むこと」に関する設問と質問調査の項目との関係（令和6年度）

ここでは「C読むこと」と質問項目との関係を見ていくが、ここでは、試験の解答とともに回答する解答努力と解答時間の過不足に関する質問（国語児童質問紙回答001、002、算数児童質問紙回答001、002、国語生徒質問紙回答001、002、数学生徒質問紙回答001、002）は除く。

「C読むこと」に関する設問と質問調査の各項目との関係を述べる前に、相関（ ρ ）の絶対値の高い項目上位はほとんどが学校質問項目ではなく、児童・生徒質問項目であることを示しておきたい。

令和6年度調査では、小学校については、「C読むこと」に関する設問と児童質問項目の相関の平均は.052（標準偏差.059）であるのに対し、学校質問項目との相関の平均は.018（標準偏差.012）しかない。同じく、中学校についても「C読むこと」と生徒質問項目の相関の平均は.075（標準偏差.083）であるのに対し、学校質問項目との相関の平均は.019（標準偏差.023）しかない。

以上のことから、児童・生徒質問項目のほうが学校質問項目よりも「C読むこと」の試験の結果とより近い関係にあるということが言えよう。

それを踏まえたうえで、令和6年度調査の上位の項目を見ると、児童質問項目で「C読むこと」との相関が最も高いのは「国語の授業の内容はよくわかりますか」（児童質問回答050）である。以下、「放課後や週末に何をしてお過ごしが多いですか（複数選択） 家で勉強や読書をしている」（児童質問回答02601）、「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか」（児童質問回答054）、「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか（雑誌、新聞、教科書は除く）」（児童質問回答023）、

「算数の授業の内容はよく分かりますか」（児童質問回答058）、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」（児童質問回答036）、「国語の授業で、物語を読むときに、登場人物の性格や特徴、物語全体を具体的にイメージし、どのような表現で描かれているのかに着目していますか」（児童質問回答055）、「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」と続く（児童質問回答035）。

国語の授業理解に関する項目が、相対的に高い相関を持つのは当然であるが、課外の読書習慣や自宅にある本の冊数、文学的な文章における、登場人物の性格や特徴、物語全体への具体的なイメージや表現への着目は、「読むこと」との相関が高い。これらの項目は課題解決への積極性・自律性は「C読むこと」に限らず試験全体の正答数との相関が高い項目である。興味深いのは、書くことが読むことと関係していることと、算数の授業理解との相関が高いことである。算数の問題を解くには、問題そのものを読み解く力が関係しているものと思われる。

学校質問項目の中で児童の「C読むこと」との相関が上位にあるのは「調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか」（学校質問回答026）、「調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」（学校質問回答025）、「調査対象学年の児童は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか」（学校質問回答007）といった項目である。発言や発表が読むことと関係しているのは、児童質問で書くこととの相関があったのと同様、考えながら言葉を産出することが言葉の受容（読むこと）を深くすることと関係しているのであろう。落ち着いた環境が学習の結果と結びつくのは納得のできるところで、この点は読むことに限らないようである。

生徒回答項目と中学校国語の「C読むこと」の正答率との相関を見てみると、上位にある項目が「1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」（生徒質問回答036）、「放課後や週末に何をしてお過ごしが多いですか（複数選択） 家で勉強や読書をしている」（生徒質問項目026_02）、「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか（一般の雑誌、新聞、教科書は除く）」（生徒質問項目023）、「1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組

立てなどを工夫して発表していましたか」(生徒質問項目 035)、「数学の授業の内容はよく分かりますか」(生徒質問項目 058)であるのは、児童の場合とよく似ている。興味深いのは、児童に比べて、生徒では「国語の授業の内容はよく分かりますか」(生徒質問回答 050)の順位(12位)が相対的に下がっていること、「1、2年生のときに受けた授業では、英語を聞いて(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問項目 067)、「1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問回答 068)や「1、2年生のときに受けた授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思いますか」(生徒質問項目 071)、「国語の授業で、説明的な文章を読み、目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を解釈していますか」(生徒質問回答 055)との相関が高いことなどである。生徒質問回答 055については、小学校では同様の質問が「物語」についてされており(児童質問回答 055)、中学校では「説明的な文章」について質問されているが、相関が高い点は読むことの対象が変わっても共通である。また、数学のみならず、英語も含めて、読むことは学力の多くの面と関連が深いことがうかがえる。

学校質問項目の中で生徒の「C読むこと」との相関が上位にある項目は児童と類似しており、上位3項目は発言や発表の工夫(学校質問回答 026)、課題解決への積極性・自律性(学校質問回答 025)、落ち着いた環境(学校質問回答 007)といった項目であった。5位に生徒の学習の計画性(学校質問回答 029)が上がっているのは中学校ならではかもしれない。

5-5-2 「C読むこと」に関する設問と質問調査の項目との関係(令和5年度)

一方、令和5年度の調査について分析してみたところ、上位の項目は令和6年度とほぼ同様の傾向を示している。令和5年度調査の児童質問回答のうち、「C読むこと」との相関が上位にある10項目は、相関の高い順に「算数の授業の内容はよく分かりますか」(児童質問紙回答 053)、「国語の授業の内容はよく分かりますか」(児童質問回答 045)、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(児童質問紙回答 033)、「読書は好きですか」(児童質問紙回答 024)、「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」(児童質問紙回答 032)、「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか(雑誌、新聞、教科書は除く)」(児童質問紙回答 022)、「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」(児童質問紙回答 034)、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」(児童質問紙回答 037)、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」(児童質問紙回答 039)、「国語の授業で、物語を読むときに、登場人物の性格や特徴、物語全体を具体的にイメージし、どのような表現で描かれているのかに着目していますか」(児童質問紙回答 050)である。(4位の「読書は好きですか」は令和6年度にはない質問項目である。)

令和5年度調査の生徒質問回答のうち、「C読むこと」との相関が上位にある10項目は、相関の高い順に「国語の授業で、文学的な文章を読み、場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基にとらえていますか」(生徒質問紙回答 054)、「1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(生徒質問紙回答 037)、「1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問紙回答 067)、「読書は好きですか」(生徒質問紙回答 024)、「1、2年生のときに受けた授業では、英語を聞いて(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問紙回答 066)、「国語の授業の内容はよく分かりますか」(生徒質問紙回答 049)、「英語の授業の内容はよく分かりますか」(生徒質問紙回答 061)、「1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」(生徒質問紙回答 036)、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」(生徒質問紙回答 041)、「1、2年生のときに受けた授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思いますか」(生徒質問紙回答 070)である。上位の項目は、順位は異なるものの、令和6年度とほぼ同様の傾向を示している。相関の順位の1位と4位には令和6年度には質問されていない「国語の授業で、文学的な文章を読み、場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基にとらえていますか」と「読書は好きですか」が挙がっており、令和6年度には5位だった「数学の授業の内容はよく分かりますか」が14位であるが、

その他の項目は同じか類似した項目である。小学校児童に比べて「国語の授業の内容はよく分かりますか」の順位が下がる点も令和6年度と類似している。

令和5年度の学校質問回答においても、児童、生徒ともほぼ同様の傾向が認められた。令和6年度調査にはない質問項目である「調査対象学年の児童／生徒は、熱意をもって勉強していると思いますか」（学校質問回答 008）が「C読むこと」との相関が最も高く、令和6年度調査で5位の学習の計画性に関する質問は令和5年度調査には設けられていないが、それ以外の上位項目はほぼ同じである。

なお、本章の分析結果は、あくまでも相関に基づく分析であるため、即座に因果関係として理解することは慎まなければならないが、なぜ相関が高くなっているのかを考えることが今後の学習・教育のあり方を考えるうえで大いに参考になるものと考えられる。

第6章 研究課題③「特定の領域の調査結果と他の領域または質問調査結果との相関に関する特徴的な結果の抽出」に係る研究成果

本章では、「研究課題③ 特定の領域の調査結果と他の領域または質問調査結果との相関に関する特徴的な結果の抽出」を行う。全国学力・学習状況調査については、これまで実施年ごとの分析、及び経年調査による分析など様々な分析が行われてきた。公表された報告書では、平均正答率と質問調査との相関は分析されているが、国語の資質・能力相互の相関についての分析は十分とは言い難い。情報の多くが文字で出題されている全国学力・学習状況調査においては、「C読むこと」の資質・能力が他の領域の調査結果に影響を与えている可能性もある。公表済みの全体の報告書では、平均正答率と質問調査との相関は分析されているが、領域ごとの結果との関係に係る分析は行われていない。そこで本章では、小学校（6年生）と中学校（3年生）において、以下の諸点を分析し、検証する。

- ・全体的に見た「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の各領域間の関係
- ・学力層別に見た「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の各領域間の関係
- ・「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の各領域と質問項目との関係

データおよび分析方法については、特に断らない限り、第5章に記した令和6年度のものとす

6-1 「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の各領域間の関係

6-1-1 小学校国語

各領域の平均正答率は「A話すこと・聞くこと」が59.7%、「B書くこと」が68.3%、「C読むこと」が70.6%である。全体の正答率との相関が高いのは「C読むこと」($r=.708$)と「A話すこと・聞くこと」($r=.692$)で、「B書くこと」は少し下がる($r=.585$)。

各領域間の相関はほぼ同レベルで、AとBの相関が $r=.268$ 、AとCの相関、BとCの相関はいずれも $r=.300$ である。中程度の相関である。

6-1-2 中学校国語

各領域の平均正答率は「A話すこと・聞くこと」が59.1%、「B書くこと」が65.6%、「C読むこと」が48.3%である。小学校国語と比較すると、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」は同水準だが、「C読むこと」は20ポイント以上低い。全体の正答率との相関が高いのは「C読むこと」($r=.790$)で、「A話すこと・聞くこと」($r=.681$)と「B書くこと」($r=.662$)は少し下がる。小学校国語と比較すると、「C読むこと」は難度も上がり、全体との相関も高くなっている。「A話すこと・聞くこと」は同水準だが、「B書くこと」の全体との相関は小学校国語より高い。

各領域間の相関は概ね同水準で、AとBの相関が $r=.340$ 、AとCの相関が $r=.395$ 、BとCの相関が $r=.424$ である。いずれも中程度の相関である。

6-2 学力層別に見た「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の各領域間の関係

学力層とは科目ごとに正答数の高いほうから順に4分の1ずつに近づくように受験者をA層からD層に分けたものである（表6-1、表6-5）。A層が最上位層でB層がそれに次ぐ上位層である。

表6-1 国語の学力層の割合（児童）

N=978,322		
学力層 国語	正答数	割合%
A層	12-14	30.0
B層	10-11	25.6
C層	8-9	19.6
D層	0-7	24.8
合計	0-14	100.0

表6-2 正答数_国語_内容4（A話すこと・聞くこと）（児童） * 計3問中の平均正答数と得点分布（学力層別、%）

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	3	合計
A層	2.64	88.0	0.0	3.0	30.1	66.9	100.0
B層	1.96	65.5	3.0	23.3	48.1	25.6	100.0
C層	1.44	48.2	13.7	39.4	35.7	11.2	100.0
D層	0.86	28.6	38.5	40.6	17.4	3.5	100.0
全体	1.79	59.7	13.0	24.7	32.7	29.7	100.0

6-2-1 小学校国語

児童の学力層別に、各領域の平均正答数と得点分布（表 6-2、表 6-3、表 6-4）を見ると、A 層と B 層で正答数および正答率で最も大きな差がついたのは令和 6 年度においては「A 話すこと・聞くこと」である。平均正答数においても 0.68 点の差があるが、平均正答率においても 22.5 ポイントの差があり、他の領域よりも大きな差が見られる。

学力層別に、A、B、C の各領域の正答数の割合（表 6-2、表 6-3、表 6-4）を見ると、「B 書くこと」「C 読むこと」では、A 層が 8 割近く、B 層も 5 割前後が満点を取っているのに対し、「A 話すこと・聞くこと」だけは、B 層において、3 点満点中、2 点が 48.1%を占め、満点（3 点）は 25.6%しかない。

一方、C 層と D 層の差が最も大きいのは、正答数・正答率ともに「C 読むこと」である。である。正答数の差は 0.82 点で、正答率の差は 27.6 ポイントである。

表 6-3 正答数_国語_内容 5（B 書くこと）（児童） * 計 2 問中の平均正答数と得点分布（学力層別、%）

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	合計
A層	1.77	88.6	0.4	22.1	77.5	100.0
B層	1.49	74.5	3.4	44.2	52.4	100.0
C層	1.28	64.2	9.1	53.5	37.4	100.0
D層	0.82	40.8	34.2	50.2	15.7	100.0
全体	1.37	68.3	11.2	40.9	47.9	100.0

表 6-4 正答数_国語_内容 6（C 読むこと）（児童） * 計 3 問中の平均正答数と得点分布（学力層別、%）

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	3	合計
A層	2.79	92.9	0.0	0.9	19.5	79.6	100.0
B層	2.37	79.7	0.5	8.8	42.0	48.7	100.0
C層	1.97	65.7	3.7	22.2	47.3	26.7	100.0
D層	1.15	38.2	27.5	37.2	28.6	6.7	100.0
全体	2.12	70.6	7.7	16.1	33.0	43.3	100.0

6-2-2 中学校国語

生徒の学力層別に、各領域の平均正答数と得点分布（表 6-6、6-7、6-8）を見ると、A 層と B 層で正答数および正答率で最も大きな差がついたのは令和 6 年度においては「C 読むこと」である。平均正答数においても 0.99 点の差があるが、平均正答率においても 24.8 ポイントの差があり、他の領域よりも大きな差が見られる。

一方、C 層と D 層の差が最も大きいのは、正答数においては「C 読むこと」であるが、正答率においては「B 書くこと」である。正答数の差は 0.78 点で、正答率の差は 28.5 ポイントである。

表 6-5 国語の学力層の割合（生徒）

学力層 国語	正答数	割合%
A層	11-15	34.2
B層	9-10	21.1
C層	6-8	26.1
D層	1-5	18.6
全体	0-15	100.0

表 6-6 正答数_国語_内容 4（A 話すこと・聞くこと）（生徒） * 計 3 問中の平均正答数と得点分布（学力層別、%）

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	3	合計
A層	2.46	82.1	0.3	6.6	39.7	53.4	100.0
B層	1.93	64.4	2.8	23.6	51.2	22.3	100.0
C層	1.47	48.9	11.4	39.2	40.7	8.7	100.0
D層	0.77	25.6	41.2	41.9	15.7	1.1	100.0
全体	1.77	59.1	11.4	25.3	37.9	25.4	100.0

表 6-7 正答数_国語_内容 5 (B 書くこと)
(生徒) * 計 2 問中の平均正答数と得点分布
(学力層別、%)

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	合計
A 層	1.78	88.8	0.6	21.2	78.2	100.0
B 層	1.47	73.4	3.7	45.9	50.5	100.0
C 層	1.12	56.1	12.7	62.5	24.9	100.0
D 層	0.55	27.6	48.7	47.4	3.9	100.0
全体	1.31	65.6	13.4	42.1	44.6	100.0

表 6-8 正答数_国語_内容 6 (C 読むこと) (生徒)
* 計 3 問中の平均正答数と得点分布 (学力層別、%)

学力層 国語	平均 正答数	平均 正答率	0	1	2	3	4	合計
A 層	3.05	76.2	0.1	3.0	20.8	44.0	32.1	100.0
B 層	2.06	51.4	2.6	22.2	45.7	26.0	3.6	100.0
C 層	1.35	33.7	15.0	43.6	33.5	7.5	0.4	100.0
D 層	0.57	14.3	52.1	39.2	8.3	0.5	0.0	100.0
全体	1.93	48.3	14.2	24.4	27.0	22.6	11.8	100.0

6-3 「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の各領域と質問項目との関係

6-3-1 小学校国語

各領域の正答率と児童質問回答の相関係数 (ρ) を算出し、相関の高い順に順位を算出して比較した。

「C 読むこと」との相関が最も高かったのは、「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」(国語・児童質問回答 001)であり、次に「今回の算数の問題では、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」(算数・児童質問回答 001)であった。それぞれ「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」「書く問題で解答しなかった」という選択肢があり、書く問題の解答の努力の程度を見る質問である。この 2 項目は「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」との相関でも 1 位と 2 位であった。3 位と 4 位は「解答時間は十分でしたか (国語)」(国語・児童質問回答 001)、「解答時間は十分でしたか (算数)」(算数・児童質問回答 002)であり、これらは「C 読むこと」との相関の順位が高いのに対し、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」との相関の順位がそれぞれ 76 位と 69 位であり、対照的である。

「C 読むこと」との相関の順位は、以下、5 位「国語の授業の内容はよく分かりますか」(児童質問回答 052)、6 位「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか (複数選択) 一家で勉強や読書をしている」(児童質問回答 026_01)、7 位「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか」(児童質問回答 054)、8 位「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか (雑誌、新聞、教科書は除く)」(児童質問回答 023)、9 位「算数の授業の内容はよく分かりますか」(児童質問回答 058)、10 位「5 年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(児童質問回答 036)と続く。しかしながら、上述の解答時間に関する 2 問以外は、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」においても 1 桁の順位であり、「C 読むこと」との間に大きな違いはない。

さらに国語の学力層との相関は、算数の授業理解と最も相関が高い。領域別にみると、「A 話すこと・聞くこと」との相関順位が 1 位で、「B 書くこと」(3 位)、「C 読むこと」(5 位)よりも高い。

6-3-2 中学校国語

各領域の正答率と生徒質問回答の相関係数を算出し、相関の高い順に順位を算出して比較したところ、最も相関が高かったのは「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」(国語・生徒質問回答 001)であり、次に「今回の数学の問題では、解答を言葉や数、式を使って説明する問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」(数学・数学質問回答 002)であった。

また、概ね各領域とも正答率との相関が高かったのは、「1、2 年生のときに受けた授業では、英語を読んで (一文一文ではなく全体の) 概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問回答 068)、「1、2 年生のときに受けた授業では、英語を聞いて (一文一文ではなく

全体の) 概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」(生徒質問回答 067)、「国語の授業で、説明的な文章を読み、目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を解釈していますか」(生徒質問回答 055)、「1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(生徒質問回答 036)、「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか(複数選択) 一家で勉強や読書をしている」(生徒回答質問 026_02)、「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか(一般の雑誌、新聞、教科書は除く)」(生徒質問項目 023) などであった。

あえて特徴的な点を探すと、「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか(一般の雑誌、新聞、教科書は除く)」(生徒質問項目 023)は「A話すこと・聞くこと」との相関の順位が3位であり、「C読むこと」(7位)、「B書くこと」(11位)よりも順位が高かった。

中学校の学校質問回答の中で相対的に相関の順位の高い項目は、小学校の場合とほぼ同じで、発言や発表の工夫、課題解決への積極性・自律性、自律的計画性、学習の協働性などが、相対的に相関が高いが、特徴的な部分として、英語の授業において、前年度までに、スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する言語活動を行っている学校や、数学の授業で問題の答えを求めさせるだけではなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、生徒に筋道を立てて説明させるような授業を行っている学校の方が国語の正答率との相関が高い傾向がある点である。

第7章 研究課題④「その他、令和6年度調査結果に関する顕著な特徴に係る分析」に係る研究成果

ここでは「研究課題④ その他、令和6年度調査結果に関する顕著な特徴についての分析」を行う。すでに調査結果の全体像や、各設問と児童・生徒及び学校への質問項目の関係などについて基本的な分析が公表されているが、ここでは、全体の結果を確認したうえで、特に(1)国語と算数・数学の設問の関係、(2)国語の設問間の相関や設問の分類から見る資質・能力の関係、(3)無回答と解答時間の分析、(4)正答率の性差などについて分析・考察を行う。

データおよび分析方法については、特に断らない限り、第5章に記した令和6年度のものとする。

7-1 全体的な結果、および国語と算数の設問の関係（小学校）

小学校国語調査の正答数、正答率の記述統計量（表7-1-1、表7-1-2）は以下のとおりである。

表 7-1-1 小学校国語調査正答数の記述統計量

正答数 国語	
度数	有効
	978,322
	欠損値
	0
平均値	9.46
中央値	10
標準偏差	3.09
範囲	14.0
最小値	0
最大値	14

表 7-1-2 児童の国語調査正答率の記述統計量

正答率 国語	
度数	有効
	978,322
	欠損値
	0
平均値	67.60
中央値	71.40
標準偏差	22.08
範囲	100.0
最小値	0.0
最大値	100.0

国語の正答数と算数の正答数の相関は $r=.687$ とかなり高い。国語と算数の両教科が得意な児童もいればそうでない児童もいると言える。

算数の正答数と国語の各設問の相関を見ると、最も高かったのは設問08の漢字を正しく書く設問 ($r=.421$) であった。漢字を正しく書く設問に続いて相関の高い設問は、設問14、設問09、設問11、設問10 ($r=.409\sim.340$) であった。設問09の漢字を正しく書く設問を除くと、設問14は「日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに関与することに気付くことができるかどうかをみる」知識及び技能に関する設問、設問11は「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる」設問（「C読むこと」の「構造と内容の把握」）、設問10は「文の中における主語と述語との関係を捉えることができるかどうかをみる」知識及び技能に関する設問である。

7-2 各設問の相関と分類から考える資質・能力間の関係（小学校）

まず、正答数および設問間の相関をみてもみる（表7-2）。正答数との相関が最も高かったのは設問14である ($r=.578$)。設問14と0.2以上の相関を示した設問も10問あり、設問14が最も多い。

表 7-2 小学校国語の正答数および各設問の間の相関 (r)

表 7-2 国語の正答率と各設問間の相関 (7)															
正答数	国語 01	国語 02	国語 03	国語 04	国語 05	国語 06	国語 07	国語 08	国語 09	国語 10	国語 11	国語 12	国語 13	国語 14	
正答数	1	0.464	0.498	0.448	0.520	0.486	0.463	0.406	0.530	0.505	0.475	0.506	0.448	0.512	0.578
国語 01	0.464	1	0.220	0.149	0.234	0.172	0.152	0.109	0.175	0.151	0.153	0.165	0.118	0.134	0.182
国語 02	0.498	0.220	1	0.221	0.230	0.200	0.209	0.124	0.181	0.174	0.172	0.186	0.150	0.166	0.217
国語 03	0.448	0.149	0.221	1	0.256	0.156	0.133	0.103	0.161	0.133	0.144	0.149	0.101	0.110	0.152
国語 04	0.520	0.234	0.230	0.256	1	0.192	0.183	0.126	0.200	0.175	0.183	0.207	0.146	0.151	0.215
国語 05	0.486	0.172	0.200	0.156	0.192	1	0.293	0.131	0.176	0.187	0.173	0.196	0.160	0.183	0.236
国語 06	0.463	0.152	0.209	0.133	0.183	0.293	1	0.130	0.169	0.195	0.163	0.181	0.171	0.184	0.237
国語 07	0.406	0.109	0.124	0.103	0.126	0.131	0.130	1	0.145	0.144	0.117	0.121	0.104	0.189	0.155
国語 08	0.530	0.175	0.181	0.161	0.200	0.176	0.169	0.145	1	0.349	0.193	0.200	0.137	0.225	0.239
国語 09	0.505	0.151	0.174	0.133	0.175	0.187	0.195	0.144	0.349	1	0.177	0.182	0.149	0.238	0.240
国語 10	0.475	0.153	0.172	0.144	0.183	0.173	0.163	0.117	0.193	0.177	1	0.131	0.173	0.177	0.239
国語 11	0.506	0.165	0.186	0.149	0.207	0.196	0.181	0.121	0.200	0.182	0.131	1	0.227	0.219	0.276
国語 12	0.448	0.118	0.150	0.101	0.146	0.160	0.171	0.104	0.137	0.149	0.173	0.227	1	0.195	0.257
国語 13	0.512	0.134	0.166	0.110	0.151	0.183	0.184	0.189	0.225	0.238	0.177	0.219	0.195	1	0.353
国語 14	0.578	0.182	0.217	0.152	0.215	0.236	0.237	0.155	0.239	0.240	0.239	0.276	0.257	0.353	1

有意水準はすべて $p < .001$ 、太字は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

設問 14 は「読書」の知識及び技能に関する設問であるが、漢字を正しく書く設問 (08、09) とも相対的に高い相関があることから、語彙や漢字の知識及び技能との関連も相対的に高い設問だと考えられる。

設問 14 に次いで正答数との相関が高いのは設問 08 の漢字を正しく書く設問である ($r = .530$)。同じく漢字を正しく書く設問である設問 09 も正答数との相関が 0.5 を超えている。設問 08 との相関が 0.2 以上の設問が 5 問あり、同じ漢字を正しく書く設問である設問 09 との相関が高い ($r = .349$) のは当然であるが、設問 14、設問 13、設問 04、設問 11 との相関も 0.2 以上である。これらのうち、設問 13 は「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる」設問であるが、記述式設問であるため、設問 08、設問 09 との相関が高めになる可能性が考えられる。

7-3 無回答および解答時間の分析 (小学校)

無回答が多いのは漢字を正しく書く設問 (08 : 13.3%、09 : 8.1%) と記述式設問 (13 : 12.7%、07 : 5.0%) である。

段階 1~14 (無回答 : 0、誤答 1 : 正答 3) と「解答時間は十分でしたか」という児童質問回答 002 との相関が最も高かったのは、最後から二番目の設問 13 (記述式問題) であり ($r = .245$)、次が最後の設問 14 (選択式問題) である ($r = .186$)。また、中間に位置する漢字を正しく書く設問の段階 08、09 と解答時間の質問との相関が次に高い ($r = .141$ 、 $r = .113$)。漢字を正確に書く知識及び技能に関する資質・能力が他の設問以上に解答時間と関係していることを示すと考えられる。

「解答時間は十分でしたか」(国語・児童質問回答 002) と他の児童質問回答の相関は、全体にあまり高くないが、0.1 を超える質問項目は、「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」(国語・児童質問回答 001、 $r = .186$)、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1 日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」(児童質問回答 022、 $r = .101$) で、次いで「国語の授業の内容はよく分かりますか」(児童質問回答 050、 $r = .093$)、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」(児童質問回答 044、 $r = .093$)、「5 年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」(児童質問回答 037、 $r = .093$)、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」(児童質問回答 020、 $r = .092$) と続く。

一方、数値は高くないが、逆相関を示した項目の上位 3 項目「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか (複数選択) 一家でテレビや動画を見たり、ゲームをしたり、SNS を利用したりしている」(児童質問回答 026_07)、「普段 (月曜日から金曜日)、1 日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム (コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む) をしますか」(児童質問回答 005)、「普段 (月曜日から金曜日)、1 日当たりどれくらいの時間、携帯

電話やスマートフォンで SNS や動画視聴などをしますか」(児童質問回答 006) は、いずれも動画やテレビの視聴、ゲーム、SNS、スマートフォンの使用時間に関わる質問であった。いずれも多いほど解答時間が十分でないと感じた児童が多かった ($r=-.026\sim.013$)。

7-4 全体的な結果、および国語と数学の問題の関係（中学校）

本節では、中学3年生の生徒を対象に実施された試験の結果を分析する。

中学校国語調査の正答数、正答率の記述統計量（表 7-4-1、表 7-4-2）は以下のとおりである。

表 7-4-1 中学校国語調査正答数の記述統計

正答率 国語	
度数	有効 910,414
	欠損値 0
平均値	58.41
中央値	60
標準偏差	22.50
範囲	100.0
最小値	.0
最大値	100.0

表 7-4-2 中学校国語調査正答率の記述統計

正答数 国語	
度数	有効 910,414
	欠損値 0
平均値	8.76
中央値	9
標準偏差	3.38
範囲	15
最小値	0
最大値	15

表 7-4-3 中学校国語各問の記述統計

計 N=910,414

設問	平均	標準偏差
国語 01	.64	.481
国語 02	.69	.463
国語 03	.44	.497
国語 04	.45	.498
国語 05	.37	.482
国語 06	.75	.430
国語 07	.65	.478
国語 08	.43	.495
国語 09	.82	.388
国語 10	.54	.498
国語 11	.69	.462
国語 12	.50	.500
国語 13	.55	.497
国語 14	.49	.500
国語 15	.76	.429

国語の正答数と数学の正答数の相関は $r=.718$ で、国語と数学の両教科が得意な生徒も少なくないが、そうでない生徒もいるということである。

数学の正答数と国語の各設問との相関を見ると、最も高かったのは、設問 08「目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる」記述式問題（「C読むこと」の「精査・解釈」）（ $r=.499$ ）である。数学調査では設問 16 の設問中 5 問が記述式であり、記述という点で国語と数学が関係する可能性がある。次に相関が高かったのは、設問 11 の漢字を正しく書く設問（ $r=.442$ ）である。

7-5 各設問の相関と分類から考える資質・能力間の関係（中学校）

7-5-1 正答数および各設問の間の相関に見られる特徴

正答数および設問間の相関（表 7-5）を見ると、正答数との相関が最も高かったのは設問 08「目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる」の説明文の要約の記述式問題（「C読むこと」の「精査・解釈」）である。

設問間の相関が 0.2 を超える設問数も 11 問に及んだ。「表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる」設問 12（「B書くこと」の「考えの形成、記述」）との相関（ $r=.328$ ）や、漢字を正しく書く設問 11 との相関（ $r=.306$ ）は 0.3 以上である。「文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることができるかどうかをみる」設問 07（「C読むこと」の「構造と内容の把握」）との相関（ $r=.270$ ）や、「話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」記述式設問 04（「A話すこと・聞くこと」の「話合いの進め方の検討、考えの形成、共有」）との相関（ $r=.254$ ）も相対的に高い。

表 7-5 中学校国語の正答数および各設問の間の相関 (Pearson)

	正答数	国語01	国語02	国語03	国語04	国語05	国語06	国語07	国語08	国語09	国語10	国語11	国語12	国語13	国語14	国語15
正答数	1	0.405	0.480	0.382	0.467	0.472	0.444	0.500	0.597	0.454	0.473	0.564	0.567	0.449	0.415	0.457
国語01	0.405	1	0.213	0.194	0.096	0.128	0.119	0.130	0.166	0.122	0.116	0.154	0.133	0.101	0.098	0.100
国語02	0.480	0.213	1	0.126	0.164	0.182	0.162	0.183	0.234	0.167	0.165	0.219	0.211	0.139	0.133	0.141
国語03	0.382	0.194	0.126	1	0.105	0.130	0.100	0.102	0.166	0.085	0.122	0.128	0.133	0.100	0.093	0.085
国語04	0.467	0.096	0.164	0.105	1	0.162	0.155	0.185	0.254	0.157	0.148	0.223	0.246	0.129	0.116	0.148
国語05	0.472	0.128	0.182	0.130	0.162	1	0.158	0.178	0.238	0.148	0.163	0.208	0.218	0.150	0.133	0.151
国語06	0.444	0.119	0.162	0.100	0.155	0.158	1	0.188	0.216	0.181	0.136	0.209	0.199	0.145	0.116	0.166
国語07	0.500	0.130	0.183	0.102	0.185	0.178	0.188	1	0.270	0.210	0.162	0.240	0.231	0.154	0.148	0.187
国語08	0.597	0.166	0.234	0.166	0.254	0.238	0.216	0.270	1	0.210	0.233	0.306	0.328	0.203	0.186	0.208
国語09	0.454	0.122	0.167	0.085	0.157	0.148	0.181	0.210	0.210	1	0.221	0.224	0.209	0.147	0.123	0.189
国語10	0.473	0.116	0.165	0.122	0.148	0.163	0.136	0.162	0.233	0.221	1	0.213	0.205	0.166	0.136	0.152
国語11	0.564	0.154	0.219	0.128	0.223	0.208	0.209	0.240	0.306	0.224	0.213	1	0.312	0.199	0.171	0.237
国語12	0.567	0.133	0.211	0.133	0.246	0.218	0.199	0.231	0.328	0.209	0.205	0.312	1	0.192	0.166	0.217
国語13	0.449	0.101	0.139	0.100	0.129	0.150	0.145	0.154	0.203	0.147	0.166	0.199	0.192	1	0.137	0.203
国語14	0.415	0.098	0.133	0.093	0.116	0.133	0.116	0.148	0.186	0.123	0.136	0.171	0.166	0.137	1	0.154
国語15	0.457	0.100	0.141	0.085	0.148	0.151	0.166	0.187	0.208	0.189	0.152	0.237	0.217	0.203	0.154	1

有意水準はすべて $p < .001$ 、太字は正答数との相関が 0.5 以上、または設問間の相関が 0.2 以上

7-6 無回答および解答時間の分析 (生徒)

無回答が多いのは、多い順に「表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる」設問 12 (「B 書くこと」の「考えの形成、記述」) (14.8%)、漢字を正しく書く設問 11 (10.0%)、「話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」設問 04 (「A 話すこと・聞くこと」の「話合いの進め方の検討、考えの形成、共有」) (9.8%)、「目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる」設問 08 (「C 読むこと」の「精査・解釈」) (8.3%) である。11 が漢字を正しく書く設問で、他の 3 問は記述式問題である。

7-7 正答率の性差 (小学校・中学校)

7-7-1 小学校

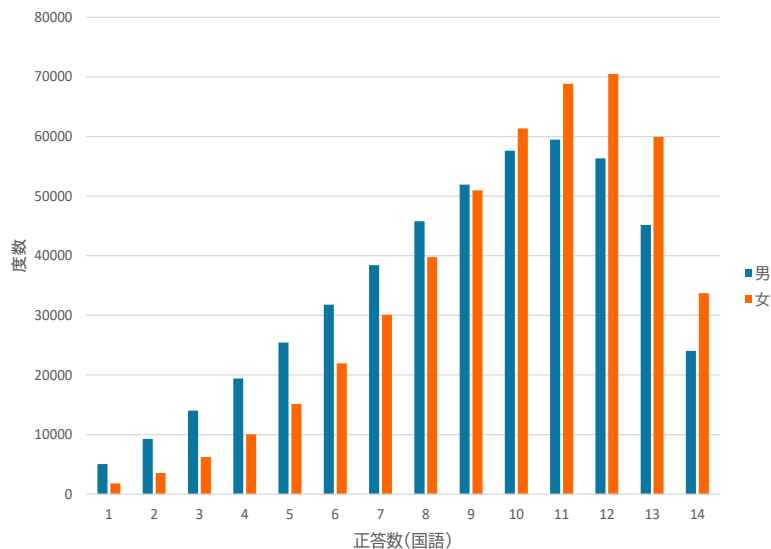
小学校国語調査の正答率は男子が 64.3% で、女子が 71.1% となっており、女子が約 6 ポイント上回っている。算数は男子が 63.4%、女子が 63.5% で、ほぼ差がないのと対照的である。

内容、観点、形式別の正答率 (表 7-7-1) の全ての項目で女子が男子を上回っているが、特に差が大きいのは記述式問題で、正答率に 9.5 ポイントの差がある。

問題別にみても全ての問題の正答率で女子が上回っているが、性差が最も小さいのは漢字を正しく書く設問 (08、09) で、0.1~0.3 ポイントの差しかない。思考力、判断力、表現力等をみる設問や記述式設問などでは、いずれも女子が数ポイント上回っている。

児童質問項目の男女差を見ると、「算数の勉強は好きですか」などの算数・理科関連の項目で男子が上回るほか、ゲームをする

図 7-7-1 小学校国語の各正答数の度数 (男女別)



時間が男子のほうが長い。一方、女子が男子を上回る項目の上位には「国語の勉強は好きですか」などの国語関連項目のほか、課外学習時間数、SNS や動画の視聴時間数がある。

表 7-7-1 小学校国語の内容、観点、形式ごとの正答率（男女別）

性別		正答率_国 語_内容1	正答率_国 語_内容2	正答率_国 語_内容3	正答率_国 語_内容4	正答率_国 語_内容5	正答率_国 語_内容6	正答率_国 語_観点1	正答率_国 語_観点2	正答率_国 語_形式1	正答率_国 語_形式2	正答率_国 語_形式3
		((1) 言葉 の特徴や 使い方)	((2) 情報 の扱い 方)	((3) 我が 国の言語 文化)	(A 話 すこと・ 聞くこ と)	(B 書 くこと)	(C 読 むこと)	(知識・ 技能)	(思考・ 判断・表 現)	(選択 式)	(短答 式)	(記述 式)
男子	平均値	61.9	84.5	70.3	56.4	64.7	66.3	67.1	62.2	66.3	58.6	59.9
	N=488,318 標準偏差	30.3	36.2	45.7	34.1	35.0	32.9	26.9	24.9	24.3	38.6	37.8
女子	平均値	67.0	89.3	79.0	63.2	72.2	75.2	72.7	69.9	73.5	60.7	69.4
	N=475,283 標準偏差	27.9	30.9	40.7	32.8	32.0	29.0	23.7	22.3	21.3	37.3	34.1
全体	平均値	64.3	86.8	74.5	59.7	68.3	70.6	69.8	65.9	69.8	59.6	64.5
	N=978,322 標準偏差	29.3	33.8	43.6	33.7	33.8	31.4	25.5	24.0	23.2	38.0	36.4

*性別「不明」は少数のためここには掲載していない。

表 7-7-2 児童質問回答のうち、女子の平均値が男子を上回る主な項目

（「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまらない」「当てはまらない」の4段階を4～1の間隔尺度とみなして男女別の平均値を出し、その差が大きい項目）

性別		児童質問 回答048	児童質問 回答054	児童質問 回答055	児童質問 回答021	児童質問 回答006	児童質問 回答013	児童質問 回答026- 05
男子	平均値	2.62	3.11	3.18	3.61	2.76	3.7	1.33
	標準偏差	0.999	0.798	0.814	1.336	1.391	0.582	0.471
女子	平均値	2.84	3.25	3.32	3.74	2.87	3.81	1.44
	標準偏差	0.939	0.742	0.753	1.282	1.391	0.471	0.496
	平均値の差	-0.22	-0.14	-0.14	-0.13	-0.11	-0.11	-0.11

児童質問回答 048：回答（４２）／国語の勉強は好きですか

児童質問回答 054：回答（４８）／国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか

児童質問回答 055：回答（４９）／国語の授業で、物語を読むときに、登場人物の性格や特徴、物語全体を具体的にイメージし、どのような表現で描かれているのかに着目していますか

児童質問回答 021：回答（２１）／学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

児童質問回答 006：回答（６）／普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴などをしますか（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）

児童質問回答 013：回答（１３）／いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか

児童質問回答 026-05：回答（２６）／放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか（複数選択）一習い事（スポ

表 7-7-3 児童質問回答のうち、男子の平均値が女子を上回る主な項目

（「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまらない」「当てはまらない」の4段階を4～1の間隔尺度とみなして男女別の平均値を出し、その差が大きい項目）

性別		児童質問回答 056	児童質問回答 005	児童質問回答 058	児童質問回答 062	児童質問回答 064	児童質問回答 061	児童質問回答 018	児童質問回答 060	児童質問回答 014	児童質問回答 026-06	児童質問回答 065	児童質問回答 035	児童質問回答 063	児童質問回答 009	児童質問回答 017
男子	平均値	3.00	3.79	3.36	2.97	3.43	3.37	3.61	3.24	2.95	1.55	3.37	3.9	3.36	3.29	3.06
	標準偏差	1.071	1.495	0.807	0.995	0.836	0.799	0.656	0.885	0.948	0.497	0.819	0.925	0.801	0.835	0.847
女子	平均値	2.55	3.44	3.09	2.7	3.2	3.17	3.41	3.05	2.78	1.38	3.2	3.76	3.22	3.16	2.96
	標準偏差	1.078	1.57	0.868	0.981	0.9	0.85	0.763	0.912	0.974	0.486	0.857	0.981	0.838	0.84	0.833
	平均値の差	0.45	0.35	0.27	0.27	0.23	0.20	0.20	0.19	0.17	0.17	0.17	0.14	0.14	0.13	0.10

児童質問回答 056：回答（5 0）／算数の勉強は好きですか

児童質問回答 005：回答（5）／普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか

児童質問回答 062：回答（5 6）／算数の問題が解けたとき、別の解き方を考えようとしていますか

児童質問回答 058：回答（5 2）／算数の授業の内容はよく分かりますか

児童質問回答 064：回答（5 8）／理科の勉強は好きですか

児童質問回答 061：回答（5 5）／算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか

児童質問回答 018：回答（1 8）／友達関係に満足していますか

児童質問回答 060：回答（5 4）／算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか

児童質問回答 014：回答（1 4）／困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか

児童質問回答 026-06：回答（2 6）／放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか（複数選択）—スポーツ（スポーツに関する習い事を含む）をしている

児童質問回答 065：回答（5 9）／自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりすることがあります

児童質問回答 035：回答（2 9）／5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか

児童質問回答 063：回答（5 7）／算数の授業で学習したことを、今後の学習で活用しようとしていますか

児童質問回答 009：回答（9）／自分には、よいところがあると思いますか

児童質問回答 017：回答（1 7）／自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか

7-7-2 中学校

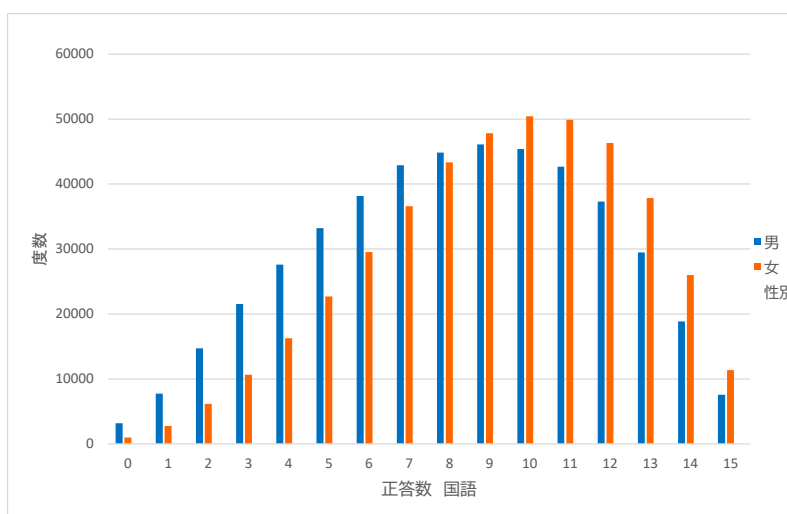
中学校国語調査の正答率は男子が 55.1%で、女子が 61.9%となっており、女子が約7ポイント上回っている。数学は男子が 53.0%、女子が 53.1%で、ほぼ差がないのと対照的である。全体的には小学校よりも難度が高くなっているが、性差の傾向は国語、数学ともほぼ同様である。

内容、観点、形式別の正答率（表 7-7-4）の全ての項目で女子が男子を上回っているが、特に差が大きいのは記述式問題で、正答率に 12.6 ポイントの差がある。「B 書くこと」でも 11.8 ポイントの差が出ている。「B 書くこと」の記述式問題である設問 12 は 16 ポイントも差があり、「A 話すこと・聞くこと」の記述式問題の設問 4 は 13 ポイントの差がある。この二つは他の内容、問題形式に比べて突出して差が大きい。児童においてみられる傾向が、生徒においてはさらに大きいと言える。

問題別にみてもほとんどの問題の正答率で女子が上回っているが、設問 01 のみ男子が 1 ポイント上回っている。上述の 12 や 4 がそれぞれ 16 ポイント、13 ポイントも女子が上回っているのとは全く異なっている。

児童において性差が小さかった漢字を正しく書く設問（11、「満ち足りた」）は、生徒では 11 ポイントの差がある。1 問のため解釈は難しいが、児童と生徒の差であるのか、あるいは語によって性差の出やすいものとそうでないものがあるのかは不明である。その他の多くの問題では、やはり女子が男子を数ポイント上回っているものが多い。

図 7-7-2 中学校国語の男女別正答数度数



生徒質問項目の男女差を見ると、児童の場合と同様、「算数の勉強は好きですか」などの算数・理

表 7-7-4 中学校国語の内容、観点、形式ごとの正答率（男女別）

性別		正答率_国語_内容1	正答率_国語_内容2	正答率_国語_内容3	正答率_国語_内容4	正答率_国語_内容5	正答率_国語_内容6	正答率_国語_観点1	正答率_国語_観点2	正答率_国語_形式1	正答率_国語_形式2	正答率_国語_形式3
		((1) 言葉の特徴や使い方)	((2) 情報の扱い方)	((3) 我が国の言語文化)	(A) 話すこと・聞くこと)	(B) 書くこと)	(C) 読むこと)	(知識・技能)	(思考・判断・表現)	(選択式)	(短答式)	(記述式)
男子	平均値	56.6	57.2	71.3	56.9	59.9	45.1	59.2	52.3	58.6	59.7	39.9
	N=461,315 標準偏差	33.9	34.9	45.2	32.0	35.5	30.7	26.4	25.3	23.6	32.5	35.6
女子	平均値	62.6	62.8	80.2	61.5	71.7	51.7	65.6	59.4	64.1	64.7	52.5
	N=438,659 標準偏差	31.8	33.7	39.8	31.4	32.7	30.3	24.2	23.8	21.6	31.0	34.9
全体	平均値	59.5	59.9	75.7	59.2	65.6	48.3	62.3	55.8	61.3	62.2	46.0
	N=899,974 標準偏差	33.0	34.4	42.9	31.8	34.7	30.7	25.6	24.8	22.8	31.8	35.8

*性別「不明」は少数のためここには掲載していない。

科関連の項目で男子が上回るほか、ゲームをする時間は児童と同様に男子のほうが長い。一方、女子が男子を上回る項目の上位には「国語の勉強は好きですか」などの国語に関連した項目のほか、SNS や動画の視聴時間数、家族と過ごす時間数、課外学習時間数、試験での記述式問題の解答努力がある。若干の順位の違いはあるが、全体的には児童とほぼ同様の傾向を示している。

このような差が、調査問題の影響による単年度の結果なのか、継続的な傾向なのかを判断するには、今回は行えなかった過去の調査の分析も必要だと考えられる。